
樹 守

KIMORI

2016

No. 25



一般社団法人日本樹木医会北海道支部

特別寄稿 「木育」をご存知ですか……………	及川 弘二	1
愛林施業と樹木医……………	真田 勝	3
《新会員紹介》		
これまでの私、そしてこれから……………	朝野 英昭	4
樹木医としてスタートラインにつく……………	今田 秀樹	5
日々精進……………	山下 雄志	6
がんばります！！……………	吉村 史明	7
そして富良野へ……………	木村 恒太	8
樹木医になってからの経験……………	濱田 拓	9
<hr/>		
函館公園のサクラ・道内最高齢のソメイヨシノ……………	山上 勝治	10
浦河町の名木を訪ねて……………	金田 正弘	12
サクラ切るバカ、ウメ切らぬバカーサクラの樹形について思う……………	桜田 通雄	17
有田勝彦氏を偲んで……………	真田 勝	19
樹齢 350 年の北海道記念保護樹木「イチイ」の土壌改良……………	村木 達男	20
白石小学校のハルニレの治療……………	阿部正太郎	24
雪虫……………	池ノ谷重男	28
[北海道外来樹種物語] シンジュ……………	真田 勝	29
極めて早い里桜の成長と大きく育った桜の行く末……………	金田 正弘	31
市民による里山の森林調査に携わって……………	笠倉 信暁	35
学び舎の桜と私……………	鈴木 順策	37
「恵庭市公園樹、街路樹シンポジウム 2015」に参加して……………	後藤 暁子	41
札幌市における保存樹木の現状と安全対策……………	佐々木一郎	42
誰が守るか保存樹木……………	真田・阿部・村木・今田	44
「哲学の木」伐採事件で思うこと……………	吉田 憲一	48
日本樹木医会埼玉大会に参加して……………	真田 勝	50
平成 27 年度 「北海道支部技術研修会」 報告……………	豊田 栄	53
平成 27 年度 北海道支部の活動報告……………	事務局	57
樹守（きもり）の編集と投稿方法……………		60
編集後記……………		61

表紙：黄金山のイチイ（石狩市浜益区実田 国有林岩見沢事業区 547 林班ぬ小班）（撮影：菅野信治 樹木医）
 樹高 18m、幹周 550cm、推定樹齢 1500 年。平成 2 年環境庁が実施した「全国の巨樹・巨木林調査」の結果、
 イチイの部で全国 6 位、道内 3 位に入った巨樹である。黄金山の麓で幾星霜を重ね、風雪に耐えてきた樹
 姿は荘厳さを増している。（平成 5 年（社）北海道国土緑化推進委員会発行「北海道の巨樹・名木」より）

「木育」をご存知ですか

北海道水産林務部森林環境局長 及川 弘二

「木育」という言葉をご存知ですか。「木育」は、平成16年に北海道・千葉県・大阪府・熊本県の4人の女性知事が、生活者や女性の視点から共通の政策課題等について意見交換を行うことを目的に開催された「女性知事リレーフォーラム in 北海道」において、高橋北海道知事が「木や森をつくることに伴って人づくりが大切」と発言したことが始まりです。

道では、これを契機に道民の皆さんと森林との新しい関係を構築していくため、公募した道民の方々とともに1年間検討を行い、人と木や森とのかかわりを主体的に考えられる豊かな心を育む取組みを「木育プロジェクト」として取りまとめ、森林と森林づくりを道民みんなで支えていく道民運動として展開しています。

「木育」は「食育」から派生した新たな言葉であることから、まず関係者が「木育とは、子どもをはじめとするすべての人が『木とふれあい、木に学び、木と生きる』取組みである」という概念を固めることからはじめ、ついで「木育」を実感できるよう、子ども達が身近に森林を体感できる「げんきの森」の設置や木玉のプールなどの木のおもちゃで遊ぶことのできる「木育広場」の開催、「赤ちゃん誕生日記念植樹」などのイベントを行ってきました。さらに木育の考え方が一定程度広がったことから、最近では「木育」の指導者となる「木育マイスター」の養成を進めています。木育マイスターとは、森林づくりや野鳥観察、木工など、森林や木材に関する得意な専門分野を有し、企画力やコーディネート力を兼ね備えた「木育」の専門家で、道では、木育イベントの企画・実施などを実地体験などの研修会の開催により、これまで全道で176名の「木育マイスター」を認定しています。木育マイスターの方々は、学校や団体が行う各地でのイベントで木育プログラムを企画し、運営あるいはアドバイスを行うなどして活躍されています。

道が木育の取組みを始めて10年が経過、この間、国の森林政策の基本である「森林・林業基本計画」にも「木育」の取組みが位置づけられるなど全国的にも広がりを見せていますが、今後、本道で「木育」を道民運動として一層進めていくためには、「木育」を道民の皆さんにより広く認識していただくことが重要です。また、そのための核となる「木育マイスター」は地域的に偏りがあり、道北や道東には少ないなどの課題があります。

このため道では、道民の方々が「木育」に触れる機会を数多く創るとともに、間伐と間伐材を使った木材加工を合わせて行うなど、ストーリー性を持った木育プログラムを提供することにより木育イベントへの参加を促し、リピーター数も増やしていくことや、サッポロビール様やコープさっぽろ様などのように、CSR活動としてスポンサーとなって頂く企業・団体等を新たに掘り起し、全道各地に木育マイスターを増やしていくことなどを進めていく考えです。

いずれにせよ「木とふれあい、木に学び、木と生きる」ことを目指す「木育」は、息の長い「人づくり」の取り組みであり、強制されるのではなく自発的に森や木材に関わり、暮らしの中に森林や木材が自然と取り込まれていることが将来の「木育」の姿で、その時「木育」は、意識することなく私たちの生活の中に溶け込んでいるものだと思います。

昨年の貴会報「樹守」に掲載された「知床の悠久の森を歩く」の投稿文を拝見しました。オホーツクの鈴木顧問は、樹木医の知識・感性をもって地域の方々に森林や樹木の働きをわかり易く伝えていただいていると感じました。樹木医の立場から個人の庭木等の診断や治療、地域の森林や公園などでの森の案内などを行っていただくことは、「木育」を広めていくうえで大変重要なことです。今後も是非、普段の活動の中で「木育」の視点を意識しつつ、専門性を発揮しながら木育に関わっていただくことを期待します。

話は変わりますが、道総研林業試験場では、樹木内部の腐朽等の欠陥を非破壊測定する装置の開発研究を行っています。これは、平成26年の支部技術研修会が林業試験場で行われた際にも説明したもので、平成29年度末までに試作機を開発する予定です。操作するうえで特別な資格が不要で画像化による精密な診断が可能な装置を目指していますので、機会があれば林業試験場で手にとって頂くなどして装置開発に御助言いただければ幸いです。

先日、NHKテレビの「新日本風土記」で、奈良県吉野町の千本桜についての放映がありました。番組では吉野桜の手入れをされている「桜守」の方が高圧洗浄機で桜の樹のコケ落としをされているところがありました。樹病学的な効用もあるのですが、「(桜が)好きだから(洗浄を)やっている」とのお話が印象的でした。こういった桜を愛でる気持ち樹木を愛する活動が、多くの道民の方々から内発され、私たちの北海道が自然も心も豊かな社会となるよう、道としても取り組んで参りますので、会員各位におかれても御理解と御協力をお願いいたします。



「森の応援団」チロルの湯（歌志内市）

愛林施業と樹木医

日本樹木医会 北海道支部長 真 田 勝

「愛林施業」聞きなれない言葉だと思いますが、国有林や道有林出身の方なら聞き覚えがあるかと思います。昭和42年（1967）10月に当時の帯広営林局長に赴任された川床典輝氏が、赴任早々より管内の山々を精力的に歩き回り、広大な道東の国有林の森林内容の充実をねらって取りまとめたのが「東大雪愛林施業計画書」です。時あたかも東京大学山部演習林では高橋延清林長（どろがめ先生）が「林分施業法」を掲げており、これに対抗したわけでもなかろうが、川床局長は山を愛する精神から「愛林施業」を掲げ、量ばかりでなく質的にも手入れをすることによって土地生産力を増進させるべく職員の意識を改革し、愛林施業に邁進したのであります。

「苦しい」と言っている木はないか。「痛い」と言っている木はないか。いつも山にいて、木を見てやりたい。そして、いつも、イキイキとした森林にしてやりたい。「愛林施業」とは、森林の面倒をよく見てやることである。森林と話しあい、森林にきき、森林とともにくらしてきたいと。

我々樹木医の扱う樹木は、大自然の中で育つ樹木とは少し異なり、人工的な環境で育てられたものが多い。いかに健康的に維持管理するか、愛情を持って生きた樹木の面倒を見なければなりません。日本樹木医会では全国から「健康優良木」を募集し、審査適合した樹木にはプレートをつけ啓蒙保護に努めていますが、北海道からは一本も応募されていないのは大変残念なことであります。風雪厳しい北国のためか、大自然に恵まれた広大な森林王国北海道でありながら、国指定の樹木が一本もないと言うのも不思議なくらいです。

厳しい環境にあるだけに、きめ細やかに一層面倒をみてやらなければなりません。その面倒の見方が問題であり、樹木医に課せられた課題でもあり、答えなければなりません。樹木は多種多様であり、樹種はもちろん一本とて同じものはありません。これら樹木の特性を見極めてその樹種、環境に見合った手入れと管理をする必要があります。

樹木は動物と違い、声を出さず反応もないので病気などの発見や原因究明は困難ですが、愛林施業のようにあらゆる知識経験を駆使し、物言わぬ樹木と対話し、動物よりはるかに長寿の樹木の健康を維持しなければなりません。長寿なだけに長い間の環境の変化や諸被害に対峙することが多くなりますが、物言わぬ樹木が痛がっていないか、苦しがないかを見極める力が必要です。

そのためには樹木医受験で経験したように樹木にかかわる幅広い知識・経験が必要であり、あらゆる機会を通じて知識の向上、新しい技術、経験を積み重ねて、いつ見ても生き生きとした健康的で美しい街路樹や公園樹などを守り育てていきたいものです。



これまでの私、そしてこれから

株式会社森林環境リアライズ 朝野 英昭 (25期)

このたび樹木医に認定され、樹木医会会員となりました朝野英昭と申します。道北の街・旭川で生まれ、大雪山や十勝岳連峰が一望できる田園地帯で育ちました。地元の高校を卒業後、林野庁の外郭団体に採用され、旭川事務所で十数年にわたって森林土木技術に関する業務に携わりました。主に上川・宗谷・留萌地区において国有林・民有林等における林道の測量・設計を担当しました。その後札幌に転勤となり、植栽・緑化技術に関する部署に配属になりました。ここでは森林再生のための整備計画・設計・施工、環境教育プログラムの企画・運営、樹木調査・診断等の業務を受け持ちました。7年後にはこの職場を中途退職し、現在勤務しているコンサルタント会社に移ることとなりました。

旭川から札幌に転勤した当時、私には植栽・緑化技術に関する知識・経験はほとんどありませんでした。右も左もわからない私は、上司や同僚からの多くの指導・助言をいただきながら、現場に向いては新しい知見を得る多忙な時期を過ごしました。また、石狩・空知・上川地区の市町村において住民参加型の植樹運動を展開するため、年間20件以上の植樹イベントや樹木観察会等を企画・運営しました。特に市町村担当者ならびに地域住民との交流の機会を得たことは、人との信頼関係を醸成するうえで何ごとにも変えがたい貴重な経験となりました。

札幌勤務もようやく一年が経過した頃、樹木診断の依頼がありました。古い神社の境内にある老齢木の樹齢が知りたいとのことで、その神社の近隣住民からの依頼でした。住民によるお清めの儀式のあとに、生長錐を使って年輪判読をする手筈でした。樹木医の上司と二人で現地に向かいました。車で片道2時間の道のりです。約束の時間どおり現場に到着というところで、私はある事に気づきました。しだいに顔が蒼ざめるのが自分でも分かりました。お察しのとおり、肝心な生長錐を車に積み忘れたのでした…(無念)。すぐさま上司に詫びて、住民には平謝りをして、概況調査のみをおこない年輪判読だけは日をあらためることになりました。後日、住民に調査結果を報告し、年輪コアも提出しました。

樹齢250年をこえる老齢巨樹(カシワ)は、現在でも地域の誇るべき財産として大事に管理され、伝承されていると聞いています。このエピソードは私にとって生涯忘れ得ないものとなりました。今思えば、私が樹木医を目指す原点はこの時だったのだらうかと思いを巡らせています。

あれから18年が過ぎ、このたび選抜試験および研修を経て樹木医として認定され、今ようやくスタートラインに立ったところです。身が引き締まる思いです。先輩方が築き上げた樹木医の地位と誇りを汚すことがないように、これからも足りない知識・技術と経験を身につけ、樹木医として社会に貢献できるよう自己研鑽に励みたいと存じます。

最後になりますが、先輩・同期のみなさんとの出会い、そしてつながりに感謝を申し上げますとともに、末永いお力添え、ご指導・ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。



樹木医としてスタートラインにつく

北海道森林整備公社 今田 秀樹 (25期)

この度、日本樹木医会北海道支部に入会させていただくことになりました平成 27 年度樹木医第 25 期の今田です。どうぞよろしくお願いいたします。

私は、平成 27 年 (2015) 6 月から北海道森林整備公社に勤務し、森林保全業務に関する仕事をしています。この仕事について一年弱と経験は浅いのですが、公社に来る前は、北海道職員として林務署 (道有林) 3 ヲ所、林業指導事務所 3 ヲ所、森づくりセンター 2 ヲ所、本庁 4 回と約 40 年、北海道の森林に関わってきました。簡単に紹介させていただきます。

昭和 51 年 (1976) から約 10 年間、林務署に勤務し、主に天然林の立木調査の仕事をしました。当時、立木調査は樹種、胸高直径、樹高を測り、木の曲がりや節などの欠点を見るときも、マサカリで木を叩いて腐れや空洞などを調べ、歩止りや品等などを付けていました。特に、木を叩く打音調査では、腐朽の有無やその大きさなどを打音から確認するため数多くの経験が必要でした。この歩止りや品等などを付けることができる調査員 (野帳持ち) になるには調査補助員として、数年、立木調査の方法や各種研修等の経験を積重ねなければ調査員にはなれませんでした。私も多くの先輩の指導や現場経験を積重ねてようやく一人前の調査員になることができました。

昭和 62 年 (1987)、林務署を離れ林業指導事務所で林業普及指導員として森林所有者等を対象に造林、下刈、除間伐などの林業に関する技術・知識の普及指導をしました。当時、人工造林のピークは過ぎていたため下刈りや除間伐等の保育指導が多く、たまに森林所有者から立木調査の指導依頼がありましたが、その多くはカラマツ等の人工林間伐のための天然林調査に比べると品等などを付けることも少なく比較的簡単な調査でした。

平成 8 年 (1996) から平成 27 年 (2015) の退職までの約 19 年の内、本庁に 12 年、森づくりセンター 2 ヲ所に勤務し、主に森林施業計画や林業普及指導員の指導等を行いました。この間、現場に行く機会は少なくなりましたが、現場に行くと日々山の木は育っていることを実感しました。時の経つのは早いもので、昨年 5 月、道水産林務部森林活用課を最後に退職し、6 月から公社に勤務させていただき、第二の人生のスタートをきりました。

公社に来てから街路樹等の調査をする機会があり、自分が今まで経験してきた立木調査等の技術・知識が活かせると考えていましたが、現実には厳しく、そう甘いものではありませんでした。街路樹等の調査は立木調査に比べて、木の葉、枝、幹、根や病害虫など多くの調査 (診断) 項目があることに驚かされました。しかし、幸いにも先輩樹木医の方々から樹木診断等のノウハウや樹木医試験のアドバイス等をいただくことができました。

樹木診断の方はまだまだ経験不足ですが、樹木医試験にはなんとか合格し、昨年 12 月に認定をいただき、樹木医としてスタートラインにつくことができました。年齢は積重ねていますが、樹木医としては駆け出しの 1 年生です。今回、貴支部に入会させていただき、経験豊富な皆様のもとで多くの技術・知識を学び、一日も早く一人前の樹木医となり、地域のみどりづくりに貢献したいと考えています。皆様のご指導をよろしくお願い申し上げます。



日々精進

三菱マテリアル不動産㈱ 山下 雄志 (25期)

平成 27 年度 (第 25 期) 樹木医研修を修了し、この度樹木医として登録されることとなりました、山下雄志と申します。北海道支部に所属する樹木医の諸先輩方と今後、末永くお付き合いさせて頂ければと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

私は現在、民間の不動産会社に勤めております。なぜ不動産会社のサラリーマンが樹木医?と疑問に思われるかもしれません。私は現在会社の「森林事業部」なる部署に所属し、不動産といってもマンションや住宅地ではなく、会社の所有する「山林」を管理しています。山林ではカラマツを主体とする人工林も管理しており、計画的にそれらを伐採して木材を販売する林業を行っています。伐採後は植栽、育林、再び収穫というサイクルで、生物多様性など自然環境にも配慮した上で持続的な森林経営に取り組んでいるところです。

植栽から最終的な収穫までは通常 50~60 年を要しますから街路樹や都市公園の植栽木と同様、数十年の育林の間に台風等の気象害、病害、虫害といった様々なリスクに晒されることとなります。これに備え、対処するために樹木医の知識や技術が役に立ち、日本樹木医会北海道支部のネットワークに所属することで先輩方に貴重な御助言を頂けるのではとの考えもあって、今回樹木医を目指すことになりました。

などと堅苦しく述べましたが、樹木医が「医者」であり、専門的で格好良い響きの名称であることも恥ずかしながら志望動機の一つとして有りました。無論、名称相応の責任や重要性があることも理解しております。大学で森林科学を専攻し、そこで樹木医補の資格を得ていた事も樹木医の道を目指した一つのきっかけでした。ちなみに学生時代は外生菌根菌、所謂「キノコ」の研究をしており、北海道のマツタケも研究テーマとしておりました。

試験は初めての挑戦で幸いにも通過することができました。試験勉強に用いた『樹木医の手引き』を初めて手に取った時、その分厚さに眩暈さえ覚えました。休日にこつこつ勉強を続けてなんとか研修まで至ることができました。試験分野がほとんど大学の講義で一度は学んだものであった事は助けになりましたが、同時に、学生時代もっと真面目に講義を聴いていればと後悔もしました。

現在は林業の分野で働いているため、樹木の診断業務といった樹木医本来の職務を行うことは普段ありません。このため樹木医会の各種研修会に参加する事は勿論、技術・知識の研鑽を継続的に進めていく事は必須であり、本会の皆さまと情報交流をさせて頂くことでもそれらをアップデートしてゆければと考えております。まだまだ未熟者ではありますが、樹木医の「人材」にいち早くなれるよう努力する所存です。日本樹木医会北海道支部の皆様、どうかご指導ご鞭撻の程宜しくお願い致します。



『がんばります！！』

横浜植木株式会社北海道支店 吉村 史明（25期）

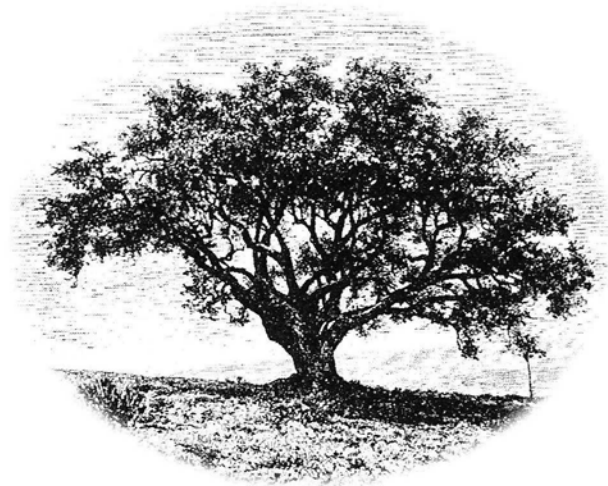
平成27年度 第25期樹木医研修を終了いたしました、吉村史明と申します。
よろしくお願いいたします。

樹木医の試験を受験したきっかけは幾人かの先輩樹木医さんとの交流でした。樹木医になることによって仕事の幅が広がり、自身のスキルも高まるのでは！！と、単純な発想です。ですが、実際に樹木医に認定されたことによって・・・。

確かに、いろいろなことに興味を持ち自身のポテンシャルも向上したと実感できるのですが、しかし、今までは「わからない」、「知らない」と言えた内容もこれからはしっかりとした見解を見定め、対応しなくてはならないという重圧がついてきたのでした。
今のままでの自分の技術、経験値、知識では、残念な樹木医です。

植物の基本的な知識すら浅学な自分が、この肩書きを堂々使えるようになるために今後は本腰を入れて植物と向き合い、貪欲に経験と学習を積み、樹木医としての社会貢献を目指しますので、北海道支部の皆様のご指導をよろしくお願いいたします。

たくさんがんばります！！





そして富良野へ

東京大学北海道演習林 木村 恒太 (21期)

はじめまして。木村恒太と申します。私は21期生(2011年)の樹木医で、今年度の新規の会員ではないのですが、仕事の関係で10月より北海道に上陸しました。これからは樹木医会北海道支部にお世話になります。どうぞよろしくお願いいたします。

樹木医を取得した頃、私は東京都から280km南の島、八丈島で自然公園の管理やビジターセンターでネイチャーガイド等をしておりました。当時は公園内の桜の木やヤシの木の倒木の危険、落枝による受傷の危険性の話があり、安全面から樹木の事を知ろうと思い、勉強を始めたのがきっかけです。

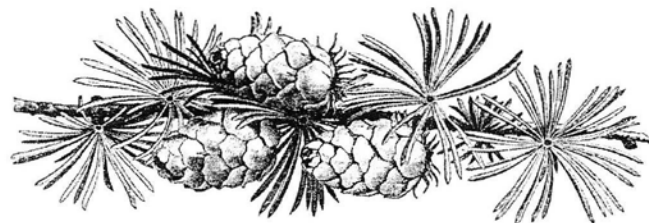
その後、転職し、東京大学演習林の秩父演習林での勤務を経て現在は富良野にあり、ます東京大学北海道演習林に勤務することになりました。

暖温帯のハイビスカスやヤシの木が街路樹に植栽されているところから、冷温帯、そして、針葉樹が優先する亜寒帯まで、だんだん職場が北上しており最北の地までやってきました。

まだ北海道での日が浅く、仕事を覚えるのにヒーヒー言っていますが、樹木医である井口氏、廣田氏ら先輩に山の事や樹種などいろいろ教えてもらう日々を過ごしています。

現在の職場では樹木医としての直接的な仕事はありませんが、フィールドで木を見て森を見る仕事をしており、そのためには樹木医としての知識や技術が非常に重要だと感じております。日々表情を変える山の中で経験し、知識を蓄え、皆様との情報交換や研修会などでスキルアップをしていければと考えております。

北海道支部の皆様、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。





樹木医になってからの経験

(株) 地域環境計画 濱田 拓 (21期)

皆様初めまして。平成23年度(21期)に樹木医試験に合格し、昨年5月から札幌に来ました濱田拓と申します。どうぞよろしくお願い致します(お時間あれば ツリードクター No.20 合格体験記もご覧ください)。

「札幌に来ました」と書きましたが、5年前までも札幌に住んでいました。単身赴任で大阪(高槻市)に異動した年、樹木医試験にチャレンジし、運よく合格することができました。その翌年からは3年間宮城(仙台市)へ。そして、また札幌に戻ってきたという次第です。

勤務している会社でやっていることは、主に自然の森の中に入って行って生えている植物を調べること。樹木の種類はある程度わかりますが、苗木の植え付けや剪定、病虫害対策などの造園的な経験は全くありません。こんなんでも「樹木医」になっていいのか?と自分に問いかけても、それぞれの地で貴重な体験をさせてもらってきました。

【大阪編】

樹木医研修を経てやっと合格したのも束の間、いきなりデビューです。自然公園内の「危険木」診断でした。普通に山の中なので、ほぼ斜面。場所によっては落石防止のネットフェンスをよじ登って目指す木のところまで行き、根本や園路から見えない裏側の腐朽を探して診断しました。

来園者の安全と景観や生命としての樹木の保存の「折り合い」に悩んだとともに、樹木医はアクロバットなバランスと、腕の筋肉がいる仕事だと気づかされました。

【宮城編】

仙台では業務としての樹木医の仕事はありませんでしたが、宮城県支部の活動として、樹木診断研修や仙台近郊の過去に樹木医さんが診断・治療された樹木の見学会などに参加させていただきました。

なかでも貴重な経験になったのは杜の都仙台のシンボルになっているケヤキの診断見学です。ドクターウッズ(音響波樹木内部診断システム)での診断と、その結果を受けて伐採した樹木の診断部の断面の観察でした。結果的には診断と実際の状況には違いがあり、樹木診断のむつかしさを改めて教えていただきました。

【札幌編】

札幌では、今年街路樹の診断をしました。道行く人々の奇異の視線に負けず、また重要な症状を見逃さないよう気を張ってやりました。しかし、同じ樹種を何本も何本も見ているうちに頭の中が混乱しそうになり、それに耐えるのが結構大変でした。

まだまだ未熟ものですが、これからどうぞよろしくお願いいたします。

函館公園のサクラ…道内最高齢のソメイヨシノ

(有)樹芸やまのえ 山上 勝治 (5期)

函館公園は明治12年(1879)、今から137年前に開園した近代日本における都市公園を代表するものの一つです。当時のイギリス領事ユースデンの「病人に病院が必要のように、健康な人にも休養する場所が必要」という呼びかけに多くの市民が賛同、資金や労力の提供なども相次ぎ、工事が進められました。市民参加で造築された函館公園は全国でも類のないものといわれています。

園内は造成当時の原型がよくとどめられ、春の花見時期には約420本のサクラが見事に開花する桜の名所ともなっています。また、道の有形文化財である旧函館博物館一号・二号や市立函館博物館本館、同図書館等、さらには道内初の動物飼育施設などがあり、多様性のある空間が函館公園の魅力でもあります。



(所在地：函館市青柳町17番地)

北海道最高齢 127歳のソメイヨシノ

現在、北海道最古のソメイヨシノが公園内に2本あります。明治24年(1891)、今から125年前、逸見諸右衛門(砂糖商)が公園に梅、桜二千三百五十本寄付植栽したとされています。植栽時苗木樹齢2年とすると樹齢127年程度と推察されます。当初に植えられたものと伝えられて来たのは2本のみで、後の大半の桜は昭和20年(1945)以降のもの(樹齢約70年)とされています。(前文は昭和30年代より同公園のサクラの歴史、生態を調査記録されてきた桜守の浅利政俊先生の報告された記事の抜粋です)。

老桜樹127歳 その1 園内北海池の近く(写真1)



折れた幹の太さからかつての大きさが想像できる



破損崩壊している发泡ウレタン



毎年若い枝にたくさんの花をつける



最後の力?

外科治療の経過とその後

過去に行われた発泡ウレタンによる空洞充填の治療痕が破損崩壊した状態になっています(写真1)。このようなケースを他の地域でもよく見かけるようになりました。最近ではウレタン充填の下地処理の際に腐朽の進行を食い止める防御帯を破壊する、発泡ウレタンの接着面が加湿になり腐朽が進行する、鳥につつかれ破損やすい、害虫のすみかになる等の弊害が多いため発泡ウレタンの充填はあまり行われなくなっています。過去においては外科治療と言えば発泡ウレタンの充填というくらい、全国いたるところで行われました。そのため、時が経ち破損し、そのまま放置されて無残な姿をさらしている治療樹木も数多く存在します。

技術は日々進化していますがどんな施術でも1年や2年で結果を見ることはできないはずです。反面、経過が良好であっても生きて成長を続ける限りは10年、20年先の変化に対する継続的な観察や何らかの処置は必要となります。せつかく人の手が加えられ、治療が施された樹木に対しては最後まで責任を持つべきと考えます。景観の維持(樹形維持)目的で行われた治療もこれでは台無しになってしまいます。

治療の完了は再生の始まり

樹木は言葉を発しません。適切な処置は危険防止、景観維持のためにも必要です。治療の完了は再生の始まりでもあるのです。過去の事例を定期的に観察するには費用面での裏付けも必要になり、時間を要するものです。公共性のある樹木については地域住民を交えたネットワーク作りなどの一工夫が今後有効になるかと思えます。

畏敬の念

整然と管理された公園の中に行き届いた剪定管理がなされた老桜樹は立っています。近づいてみるとその存在感に圧倒させられます。今は幹中段で折れてなくなった主幹の大きさから、かなりの巨木であった事が想像できます。数々の恩恵をいただいたこの老桜樹に対し畏敬の念をもって再生を願っています。

浦河町の名木を訪ねて

グリーンコンサルタント緑の総合研究所 金田 正弘 (11期)

浦河町西舎（にししゃ）にある桜並木（優駿サクラロード）の調査、診断、治療を行ったのは2011年～2015年の5年間でした（事業は昨年終了）。当初の数年間には1000本以上の桜類調査と350本の樹勢回復作業で余裕がありませんでした。これらに一定の目処がついた2014年から浦河町内にある古木、名木探しをやってみようと思いたちました。

5年前は全く見知らぬ町でしたが桜の調査が縁になり、浦河町役場の方や仕事の仲間等、町内の人達のご好意で、町内津々浦々を紹介してもらい感謝しています。また、名木を訪ねる途中、思いがけなく発見した樹木にワクワク、ドキドキの連続で、これは調査の仕事でない、単なる「木が好きなおっさん」になっていました。子供の頃1人で見つけたクワガタムシやクロアゲハ採集の感動がこの年になって呼び戻された気持ちです。見つけた名木は自分で勝手に名前を付ける等、何でもありの探索になりました。その一部について紹介します。

1. 荻伏の赤心社開拓記念のミズナラ



開拓記念のミズナラ

太平洋を見ながら国道235号線を走り、浦河町荻伏に入ると右側に赤心社と書かれた古い商店が見えてきます。道路向かいにある赤心社記念館に「1882年撰津国（現兵庫県）三田藩の武士が中心となり、この地に赤心社開拓団を結成し元浦川沿いに開拓を始めた」とあります。JR荻伏駅近くに推定樹齢300年の「赤心社開拓記念のミズナラ」があり、今も大切に保存されていました。近くに荻伏神社の大鳥居、荻伏集会所もあり、町の中心だったことがうかがえます。

2014年11月7日に調べるとH=10m、C=372cm（環境省の巨樹巨木級を軽くクリア）の大きさです。道路側の太枝が切られているものの他に枝切り痕がなく、堂々とした姿で立っていました。古木のミズナラですが大傷や腐朽が見られないのは、地域の人達が御神木として大切に取扱いしていたためでしょう。

石碑、石柱も建ち、この中の「開拓記念木の弁」を紹介します。「わたしはブナ科ミズナラです。樹齢は三百を超えています。今から百年前（明治15年、1882年）赤心社開拓団八十余名がこのあたりに入植しました。その頃この附近一帯は、わたしの仲間のほかカシワ、カツラ、ニレの類など大木が思い思いに枝を張り、大空も見えない位でした。それを開拓の人達は伐り倒し焼き払って農耕地を拓いて行きました。その時耕作地の区域外にあった

わたしたち数本は斧の難を免れましたが百年の間に切られたり枯れたりして、今ではこの附近に二、三本しか残っていません。わたしは、里人に大切にされているのでまだまだ長生きをします」。(昭和 58 年 9 月 15 日文、竹内先生)

—ミズナラ 道内を代表する落葉樹 *Quercus crispula* Blume —

2. 旧西舎小学校跡地の名木



玄関前の大イチョウ



ヤマモミジの大木

旧西舎小学校の周辺は都市部の学校では考えられない多くの樹木があります。明治 24 年 浦河小学校杵臼（きねうす）分校西舎分教場として開校（125 年前）、昭和 50 年（40 年前）学校統合のため閉校しました。その後、町の宿泊施設として使用されましたが浦河優駿ビレッジアエルができ、その役目を終えました。現在木造校舎跡は当時の面影を残したまま年月が流れています。

玄関前のイチョウに注目しました。天高くそびえ立つみごとな樹姿です。H=14m、C=313 cm（直径 1m 程の太さ）になっています。きれいに黄葉したこのイチョウは学校の来歴から 100 年を越すのではないかと推定しました。いったい誰が植えようと思ったのでしょうか。中庭にもう一本イチョウがあり株立ちですがもっと太く生長していました（カメラに収まらない）。浦河でイチョウの大木を眼前に頭が混乱してしまいました。少し冷静に樹齢等の解析が必要です。銀杏は生らないので雄木のようにです。

—イチョウ 中国原産 *Ginkgo biloba* Linn.—

敷地道路沿いのヤマモミジの紅葉は赤と黄のグラデーションが美しい大木です。他に何本かありますがこれが一番の名木です。H=12m、C=134+103+255 cm と株立状ですが生長の遅いヤマモミジとしては、めずらしい大径木です。100 年は優に越すと思われませんが傷、腐朽のない健康優良樹です。この木の前側はグランド跡地で今は牧草地になっています。多くの児童、父母、先生方を見てきた生き証人の大木です。

—ヤマモミジ 道内の自生種 *Acer palmatum var. matsumurae* Makino—

3. 白実のナナカマドが見つかった！



白実のナナカマド



白実の拡大



赤実

白実

地元新聞に「白実のナナカマドが3本ある(2013年11月掲載)」。場所は日本中央競馬会日高育成牧場構内でした。2014年秋に初めてナナカマドの白実があることを確認し、感激しました。

道路沿いに3本あり、頑丈な柵に守られていますが中は草だらけ。枯枝が多く、幹もボロボロでした。梯子をかけ、除草、枯枝切り、幹傷の処置を行いました。シカが繰り返し来て食害したようで、JRAでその後に囲ったのでしょうか。

手前のH=5mは軽傷ですが、中央と奥のH=3mは激害で何とか生きている状況です。

後日、JRAの総務担当者に3本の内1本を優駿の里公園に寄贈してもらえないかと話しましたが返事はありません(この木は、普通のナナカマドと一緒に植えた中から、たまたま3本ここに移植したものだそうです。JRA談?)。ナナカマドは通常の赤実の他、オレンジ色、ピンク、黄色の実があるようです。これに関しては旭川市の窪田信作樹木医(4期)が詳しく、栽培もしているらしい。私はこの白実を加えて5色ナナカマドの里を作る勝手な構想を練っています。

—ナナカマド 道内市町村の木に多く指定 *Sorbus commixta* Hedl.—

2015年10月18日「道新こだま」に白い実の木の記事が掲載「小樽市赤岩でタネから栽培。中国湖北省などが原産で日本では自生していない。札幌市手稲区で確認(北大植物園)」。

4. 富田牧場の桜



富田牧場内のエゾヤマザクラ (5月2日)

西舎桜並木の道路向かいにある富田牧場は歴史ある牧場です。お爺さんが桜好きで、放牧場を作る際に山の桜を残したようです。何本かある桜の中で一際大きなエゾヤマザクラ (H=15m、C=250 cm) がこれです。道々沿いにあるため、西舎に通うたびに見ていた桜でした。

競争馬放牧のため写真撮影はもとより、近くに行って計測したりできない桜でした。しかし雑誌や写真展示会等にたびたび掲載される浦河町人気の桜になっていました

(後日、撮影者は無断で遠方から望遠レンズで撮っていたようです)。

開花の様子もそうですが、そばで観察したくて役場に話し、知り合いの人を通して今年の春5月に開花を、12月に計測等の観察をさせてもらいました。富田さんに立ち合っただき、見守ってもらいながらの観察でした。放牧地に入ると馬達がゾロゾロ近づいて来ます。サラブレッドは大変臆病ですが好奇心が強く、普通に作業をしているとかならず皆寄ってくるようです。アエルの放牧場周辺で馬と一緒に仕事をしていたこともあり、富田さんの馬共々観察ができたことは大変うれしいことでした。

樹齢は百年を越しているようです。少し白っぽい花色ですが、花付きが大変良く、緑の牧草と青空によく映えています。昔上部5m位の大枝が折損落下し(右上部の枝を失う)、その痕が空洞になっているようでした(蓋がしてある)。柵で囲まれた中は堆肥が施され、大切に管理しているようです。樹冠部の枯枝や先の空洞部も気になる所ですが、山桜の本来あるべき姿を見たような気がしています。今後も桜ハンター達はこっそり物かげにかくれ撮影チャンスを窺うことでしょう。近年道路沿いに車を止めて堂々とカメラをかまえる方(観光客?)が!、事故がなければと思っています。浦河にはそんな桜があるのです。

—エゾヤマザクラ 道内自生種の桜

学名はオオヤマザクラ *Cerasus sargentii* H.Ohba—

5. 日東牧場の三本杉



三本杉 (2015年12月22日)

2011年の春、町観光課の方から「斜面の牧草地にきれいに咲く桜がある」と言われ見に行き、急斜面だし馬もいるし、近づけないと思いあきらめていました。

ずっと気になっていたこともあり、夕方、思いきって日東牧場(鎌田宅)を訪れました。すでに馬はいないし、山の木も一部伐採して桜もどうなったか…自由に見てよいと言われ、山に登るとそこには無残な桜の姿が。

あらためて5年の歳月が経っていた事を感じました。小高い丘から下を見ると西側に黒い大きな樹影が見えるではありませんか！

再び観察の許可をもらい駆け付けると、推定樹高17mの三本杉が列状に凜として立っていました。幹周は左の杉が312cm、中央の杉が278cm、右の杉が286cmと日高では最大級のようなようです。

中央と右の2本の幹には古い大きな傷があるものの（馬に齧られた？）、左の杉は無傷の健全木です。さらに50m下方には手入れのされていないアカマツ（H=7~8m）が5本あり、横に馬頭観世音大菩薩*の墓碑が立っていました。夕日に照らされた牧草地は放置され、「夏草や兵どもが夢のあと」の句を思い起こさせるありさまで、少し悲しくなりました。

—スギ 日本を代表する常緑樹 *Cryptomeria japonica* D.Don—

*馬頭観世音大菩薩

頭上に馬頭をいただいて憤怒の相をなした観世音菩薩。普通は三面で二臂（にひ）・八臂（はっぴ）などがある（臂=ひじ）。馬頭明王ともいい、八大明王の一。馬の保護神として、特に江戸時代に広く信仰された。[広辞苑]

6. あとがき

2年間探索した名木の一部、6種10本を紹介しました。まずは、印象の強かった樹木をとりあげることになりました。樹木医の調査診断としてはいささか度を越した所もあったと反省しています。人口13,000人の浦河町にも意外と広範囲に名木があることが解り、今年も続けようと思っています。今回話題としてのせる事ができなかった、江戸時代開山のお寺（照光寺、正信寺）、杵臼神社（天草開拓団の入植）、町内に広くある軽種馬育成牧場、公園、街路樹、学校等々、探索の際は関係者の皆様にお世話になりました。別の機会に取り上げたいと思っています。

道内の市町村は歴史文化、気候風土の違いがあるものの、埋もれた名木があると思っています。樹木医の皆さん、改めて自分の周辺にある名木に注目してはいかがでしょうか。その存在が解ったら来歴を調べてみることです。意外なことが解り、人とのつながりもできるものです。

積み重ねたデータは、名木の利活用につながり、思いがけない効果（価値）をもたらす可能性があると思います。何よりも「見つけ、調べる」ことが樹木医の資質を高めることにつながるのです。皆さんが、あの筑波二次研修に行った初心を忘れることがないよう活躍を期待し、この稿を終わります。

桜切るバカ、梅切らぬバカ—サクラの樹形について思う

桜田通雄（15期・森町在住）

函館市五稜郭公園のソメイヨシノのちょっと変わった樹形について、昨年の「樹守」No.24に山上さんがその由来について書いておられた。私もこちらに住んで、この公園のサクラを観光客ではない感覚で通年見るようになり、高度制限を受けたようなサクラの姿に強い違和感を憶えた一人であった。あれだけの本数のサクラが、一斉にあの姿、あの樹形である。本州から来た友人も同じような感想を口にした。当時、剪定を決断した函館市の担当者は相当の覚悟が求められたことと思う（写真1）。

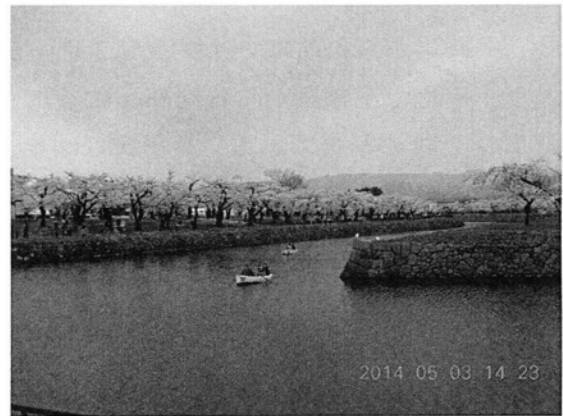


写真1 五稜郭公園 桜群遠景

私の住む森町の青葉ヶ丘公園、オニウシ公園にも桜が数多く植えられ、名所となっている。特に、青葉ヶ丘公園には大正天皇の即位記念（大典記念）としてソメイヨシノが植えられ、古木として今も数十本以上が生き続け、地元では100年桜と銘打っている。樹形は五稜郭公園のそれに近いものがある（写真2）。



写真2 森町 青葉ヶ丘公園

ソメイヨシノの寿命は60年前後と言い聞かされてきた。確かに東京などの大都市での生育環境下では平均値としての年数がそのあたりにありそうだと漠然と思う。

しかし、それ以上のものも結構生育しており、上野公園や小石川植物園などいくつもの例を見てきた。さらには一昨年、金田氏と共に見学した弘前城公園の明治時代栽植のサクラの樹齢とその姿は深く記憶に残る（写真3～5）。



写真3 弘前城



写真4 明治15年栽植の古木



写真5 同木の背部不定根（左下部）の姿

ソメイヨシノが腐朽し易いのはそうだと思うし、体質剛健という部類でもないと思う。しかし、一方100年以上の樹齢を生きてきたものが現にある。弘前城の明治15年には植えられていたというソメイヨシノの不定根の発根状況をみると桜の生命力と人為の手助けが融合した厳かな実態を見せつけられる。長命なソメイヨシノ、これは自然に任せて到達したというより、いわゆる延命治療や管理の適切化により現れた姿であり、そのことで、“いわゆる自然樹形”の感覚とは異なる樹形が存在しているという脈絡であろう。

一昨年から松前町でサクラセミナーが開催されてきたことはご存知の方もいると思う。そこで三重県から毎回熱心に参加されていた倉田浩道氏から提供いただいたのが下の2枚の写真である。倉田氏は昨年、英国のサクラ事情を調査に行ったがその折のある苗圃での桜樹の光景である。

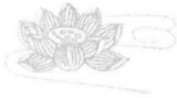


ソメイヨシノではないものの、私はこれを見て大変驚いた。今まで臃げに形成されていた桜のイメージとはまったく異なるものである。地上1メートル程で断幹し、枝を叢出させたこの写真の姿は、ものを観る視点、高さが違う、桜樹に対する新たな感覚があることを考えさせられた。今まで、サクラの樹形、自然樹形はこのようなものであるという感覚は先輩たちから連綿と伝えられ、“桜切るバカ、梅切らぬバカ”の伝承と共に、そのようなものとして深く考えずに抱いてきたのであったが…。

五稜郭の姿は差し迫った状況下での究極のものであったと思うし、サクラの性質を知り、その生命力を活かしての対応であったと理解したい。そして五稜郭の試みは、若いうちから長寿となるサクラの姿を想定し、植物体自身を健康で、そして周囲の環境（日照、通風、土壌など）を健全に保つという、長い持続的な揺るぎない作業の蓄積が必須であることを明快に示唆している。

“桜切るバカ、梅切らぬバカ”の、ウメについての異論はないと思う。一方、サクラについては単純には受け取れない。将来の樹形を構想し、腐朽防止などの適切な措置の下での切断、樹枝の選抜・誘導は欠かせないという難しい作業を求めていることを教唆している言い伝えであると思う。サクラの樹木特性を踏まえた、若木の時期からの将来を想定した樹形整姿が重要なテーマになる。困った時点での単発的対応ではなく、長い時間軸での持続的・計画的対応である。

樹木医分野の知見集積と現場への適用が、百歳以上のサクラの輩出を支えることでありと強く思う。それにより国花でもある桜が古木の姿で全国各地に生育しているとすれば、世界文化遺産のようなこととして誇れるであろうし、日本国の品格を一段と上げることになると考えるのは私一人ではないと確信している。



有田勝彦氏を偲んで

北海道支部長 真田 勝

私達の先輩樹木医である第3期生の有田氏が昨年の11月10日に肺炎のためお亡くなりになりました、享年75歳でした。

有田氏を偲んで、ごく一部ではありますが、ご生前の生い立ちやご活躍の様子など紹介させて頂きたいと思えます。

有田氏は名古屋市内の自然に乏しいところで生まれ育ったそうで、そのせいか植物や昆虫などの自然に興味をもたれ（詳細は樹守11号参照）、大学も林学を専攻され、卒業後は滋賀県庁に入り森林・林業関係の技術職として36年間務められました。そのうち15年は試験研究機関で森林保護関係に従事され、「スギ・ヒノキの穿孔虫被害防除に関する研究」など多くの論文を発表され、平成13年滋賀県森林センター所長を最後に定年退職されました。

学生時代や息子さんが網走の大学に進まれたこともあって道内をたびたび旅行され、北海道が好きになり永住を考えられたそうです。長く住み慣れた滋賀の環境と似た永住募集の地を探し求め平成13年5月白老町竹浦に移住されました。すぐさま北海道支部に転入されるや、支部開催の研修会や講演会などに積極的に参加され、滋賀県とは違った樹種構成や自然環境の生態を勉強され、会誌「樹守」にも積極的に投稿していただきました。当時の編集者として大変あり難く感謝申し上げます。

地域神社のサクラの治療や白老アイヌ記念広場のハルニレの診断など樹木医として活躍されるとともにポロトの森ネイチャーガイド「めむの会」や「しらおい森林療法研究会」の代表を務められ、自然の成り立ちや大切さを解説されました。また、高齢者の健康維持増進を図るため、森林ウォーキングなどで森林の持つ癒し効果を活用し、健康づくりを町内に普及し地域活性化にも努力されていました。

移り住んだ我が家の居間からはJR室蘭線越しに琵琶湖を思い起こさせる噴火湾を眺めながら北海道の気候や植生の勉強に励んで居られたことでしょうか。まだまだ活躍して頂けると思っていたのですが誠に残念でなりません。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

樹齢 350 年の北海道記念保護樹木「イチイ」の土壤改良

村 木 達 男 (21 期)

昨年（平成 26 年）10 月頃、上川総合振興局環境生活課の担当者から記念保護樹木のイチイ「長谷川の水松」が枯れそうになっているが治療できるか相談がありました。

早速、現地 of 樹木を見に行ったところ、ほとんどの枝が枯れている状態で回復できるかどうか不安もありましたが、真田、豊田、阿部各氏に相談したところ、早期に土壤改良等を行えば何とかなるかもしれないと話がまとまり、平成 27 年 5 月に 4 名で下見にでかけ、治療として土壤改良を行うことになりました。



「北海道の巨樹・名木」に掲載された
長谷川の水松（平成 5 年発行）



（平成 26 年 11 月 東側から撮影）

北海道が設置した解説板には次のように記載されています。

長谷川の水松記念保護樹木

この木は、樹齢 350 年と推定されているイチイです。

イチイは別名オンコとも呼ばれ、北海道に生育する代表的な針葉樹の一つで、庭木などとして多くの人々に親しまれています。

幹の直径は約 77cm で、樹高は約 8m あります。明治 33 年に先代長谷川太十氏が富山県から入植した当時からこの地にあり、樹形が良いことから開拓記念樹として保存されてきたものです。

昭和 50 年 6 月 21 日指定

北 海 道

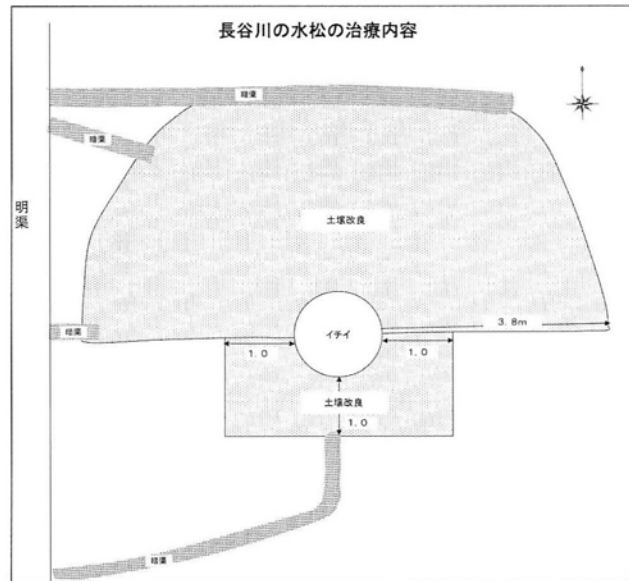
樹木の状況について

当該樹木の現状は写真のとおりで、平成20年頃から枝枯れが目立ち、年々衰退し、現在は北西側の枝にわずかに残った葉も枯れ始め、北東側の胴吹き枝にわずかに元気な葉が見られる状態である。土盛りされたことなどから、根が腐ってきている状態であり、土壌の通気性を改善する必要がある。

治療内容

北側に根が張っていることから、北側半径3.8m、深さ30cmの土を剥ぎ取り、黒曜石パーライト8%、木炭粉4%、ピートモス4%、計15~16%の土壌改良材を混ぜ合わせ、さらに、地表~地下15cmまでの土には吸収根が多いので、比較的吸収が早い細粒の緩効性肥料を、地下15~30cmの土には中粒の緩効性肥料を混ぜ合わせ、埋め戻しを行った。

南側は幹の回りにわずかに細根が生きていることから、幹から幅1mの土を剥ぎ取り、北側と同様の土壌改良を行った。



施工図



北東側 掘り取り状況



北西側 掘り取り後の発根促進剤散布

埋め戻し後、発根促進剤「鬮根 242」500 倍液を表土に散布、最後に元肥の形で固形肥料まるやま 3 号を深さ 40cm 前後で 35 カ所 70 個を埋設した。



掘り上げた土と土壤改良材の混合



埋め戻し後、発根促進剤の散布

土壤の排水性を改善するために暗渠として黒曜石パーライトを 20cm 幅で設置。また、幹の日焼けを改善するため、地上 2m まで麻布テープを幹に巻き付けた。

枯れかかった葉を改善するため、アミノ酸水溶液「まるまるアミノ 332」500 倍液（展着剤「アプローチ BI」1000 倍液を添加）を散布した。



暗渠の施工状況



幹から発生した南側の二次根



北側の暗渠



南側の暗渠

施工

発注者：北海道上川総合振興局

受託者：一般財団法人 北海道森林整備公社

施工日：平成27年6月11～12日

作業者：真田勝、豊田栄、阿部正太郎各樹木医

村木達男（森林保全課長代理）、今田秀樹（森林保全課長）

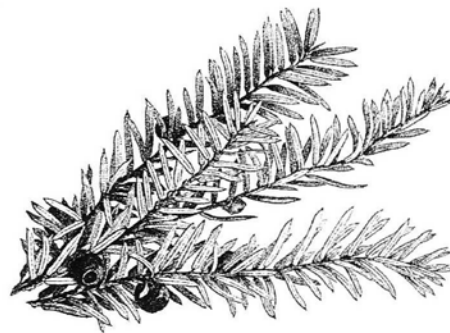
北海道環境生活部、上川総合振興局、中富良野町産業建設課の立会で行った。

作業に当たりましては地元の中富良野町や上川総合振興局から資材の提供をいただくとともに、作業に人手が足りず、施工の当日には立会の方々にもお手伝いをいただき、6月12日の夕方、ようやく治療を終えることができました。

さらに治療効果を高めるため、その後数ヶ月にわたり発根促進剤やアミノ酸の散布を中富良野町の杉木係長さんをお願いすることとなりました。

お手伝いいただいた皆さんに感謝申し上げます。

下の写真は治療から4か月が経過した10月10日の樹木の状況です。



Taxus baccata (西洋イチイ)

白石小学校のハルニレの治療

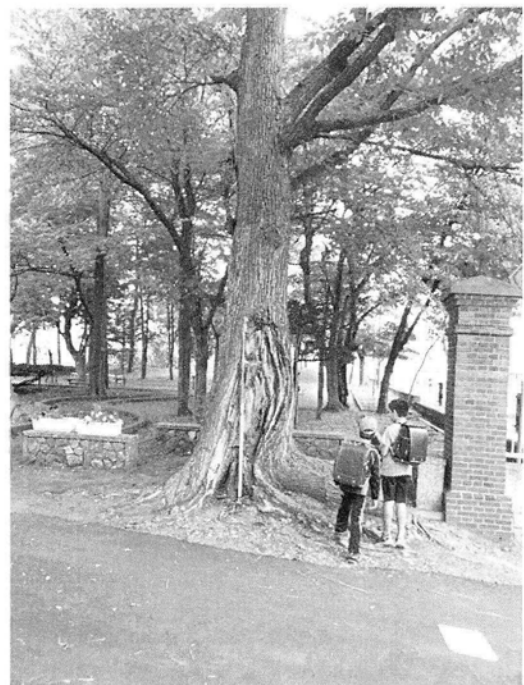
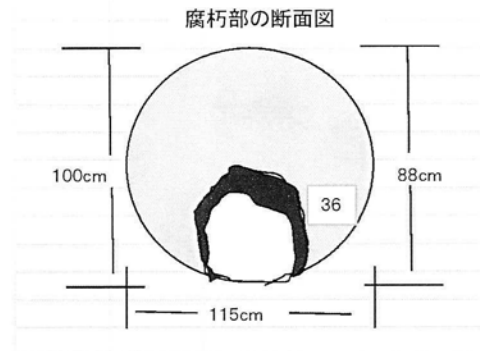
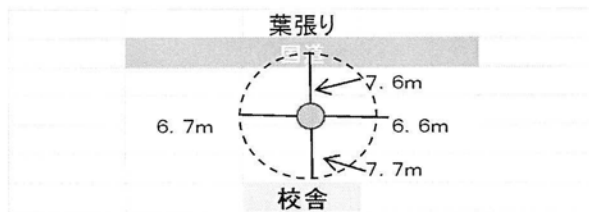
阿部 正太郎 (12期)

治療に至る経緯

白石小学校から“校木になっているハルニレがあるが、根元に大きな穴があいていて、よく子供達が手を入れて遊んでいる、穴もだんだん大きくなったような気がする、危険はないか見てもらえないだろうか”という依頼の電話が事務局のほうにあり、真田支部長に話して一緒に見に行くことにした。

学校は札幌市白石区の国道12号線に面しており、このハルニレは正門を入れて直ぐ右側に立っている。校木になるだけに大きく見事な木であるが、通路側の幹の部分に根元から幹の上の方にかけて永年の腐朽の進行による大きな穴が開いており、周りにカステラ状の木片が付いている。この木片を生徒達はいじって取り出すのだろう。

幹周は胸高で300cm、根元で400cm、樹高は28mであり、幹と高さ、葉張りなどはバランスがとれている。



腐朽の状況は左頁下の写真等のおりで、かなり目立つ状態となっているが、樹体を保持する十分な健全部があり、支持根もしっかりしているので、剪定により樹形を損なうことなく枯れ枝や込み合っている枝を切除して風圧を弱めれば十分に保全出来るように思われた。

そのためには、腐朽をこれ以上進行させないための治療と剪定が必要であることを学校に伝え、治療資材費（3万円）だけを学校で負担してもらい、腐朽治療は此方でやることになった。

治療方法

真田・豊田・阿部の3人で10月8日の「木の日」に実行することにしたが、当日は暴風雨の予報のため1日繰り上げて7日（水）の実行となり、見学と手伝いに村木・秋本・菅野樹木医と今田氏（H27樹木医合格）が来てくれた。

最初に腐朽部の防御帯を傷つけないように削り取り、トップジンMペーストを浸みこませるようによく塗り、空洞部分にPEATモスと糲殻燻炭に水を加えて混ぜ合わせ、ダンゴ状にしたものを充填する。上から金網を被せて安定化を図り、その上から人工樹皮のウッディドクターを塗付し、乾燥硬化後、治療部分をさらに強固にするため木工ボンドを塗布した。

最初は充填部の安定化を図る資材として、手持ちのビニール製のネットがあったので、これを被せてやったが、安定性に問題がありウッディドクターが付着しないので、急遽、金網にきりかえて事なきを得たが、経験の大切さがわかった。

金網は亜鉛分の多い軟らかめのものが幹に馴染んでよいようだ。また、ウッディドクターは色が明るすぎて樹木の色に合わないので墨汁を数滴垂らして使用しているが、樹木に合った着色剤があればより自然の色に近づくとと思う。

木工ボンドは塗ってしばらくは白っぽい感じがするが、やがて透明になり、ニスを塗ったようにそのあとが強固になるので良いと思っている。

午後5時前には目的とした形で終了することが出来、翌日の暴風雨の後に見に行ったが剥がれたり損傷したりしているところはなかった。

反省点

目的は果たせたような気がするが、これが一番良い方法であったのかどうか、いろいろと反省点は出てくる。

①人工樹皮のウッディドクターは治療の時に良く使うので、この時も使ったが、本来、樹木に直接塗って効果を発揮するものなので、充填剤の上から塗るのは間違っているような気がする。PEATモスと糲殻燻炭による充填は雨水が入らないように根元部の空洞のところだけに止めて、上の方は、トップジンMペーストの上から直接ウッディドクターを塗って、風と空気にさらして乾燥させた方が良かったのではないかとと思っている。

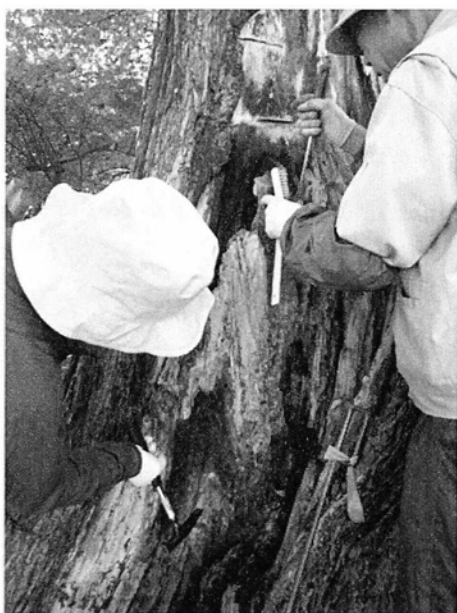
②樹木の生理上、充填剤はPEATモスと糲殻燻炭を使ったが、ハルニレは不定根を期待するのは難しいので安価な発砲スチロールにしてその上から金網を被せて安定させ、ラックバルサンで強固化を図っても良かったのではないかと、等々である。

いずれにしても患部を充填して外から見えなくした場合は何年か後には、レジストグラフなどで再調査する必要があるので、再治療が必要になった時は最良の方法を考える必要がある。

結び

今回の治療は社会貢献活動の一つとして行ったが、現場経験の機会が与えられ、完成に向けての作業も楽しく、また、学校からは飲み物や昼食の差し入れなどしていただき感謝している。

道の記念保護樹木や市町村の記念木など正規の治療の機会が与えられている樹木の他に地域住民に親しまれ、大切にされている名木でありながら、なんら指定されていないために治療されることのない木もあるので、なにかの機会に治療出来たら良いと思っている。



腐朽部の掘削・切除



見学に来た子供達に説明



トップジンMペースト塗布



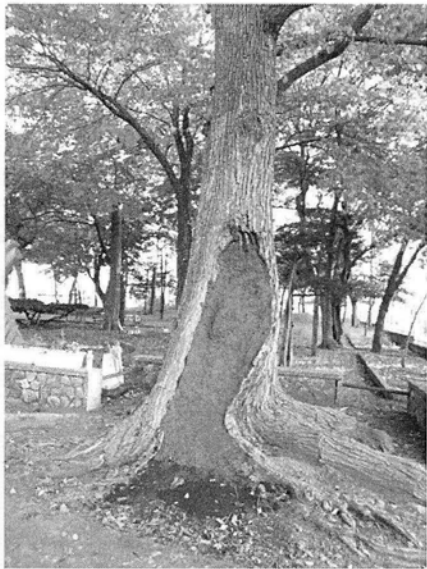
ピートモスと籾殻燻炭の団子を充填



ビニール製シートの上からウッディドクター塗付
(失敗) ⇒



急速、金網の上からウッディドクター塗付



ウッディドクター施工完了



乾燥後に木エボンド吹きつけて完成

なにこれ！ カラマツ盆栽か草もちか？

ところは厚岸町の裏山オソナイ山道有林、町指定木「逆さ水松」を探し求めて歩いている途中で奇妙な光景に出会った。整然と並んでいるところを見るとカラマツ造林地のようなようです。樹高は1m前後、刈り込んだ玉物のような樹形です。風衝樹形はよく見かけるが、どうしてこんな形になるのだろうか？さらに周囲の高さ5~6mのカラマツを見ると先が丸い樹形となっていた。成長期の海霧と日照不足がなせる技だろうか？（真田）



カラマツの奇形 (2015. 9. 16)

雪 虫

池ノ谷 重男 (第16期)

昨秋('15)は、雪虫(綿虫)の飛来が多かったと新聞等で報道されていました。雪虫の代表的なものはトドネオオワタムシですが、そのほかにニレヨスジメンチュウやケヤキフシアブラムシ(別名:ケヤキヒトスジワタムシ)もいます。これらの雪虫はいずれも樹木の害虫ですが、美唄市の道総研林業試験場緑化樹見本園ではケヤキフシアブラムシが大発生しました。

ケヤキフシアブラムシは、ケヤキの葉に虫えい(虫こぶ、ゴール)をつくることから、虫えいをケヤキハフクロフシと呼んでいます。

生態は卵で越冬、春に孵化した幼虫が新葉の裏面に寄生し、その刺激で虫えいができます(写真1、2)。虫えいの中で無翅雌が産仔繁殖して6月頃に有翅虫が脱出、ササの根に寄生し単為生殖によって繁殖します。秋になると有翅虫はケヤキに戻り、樹皮の裂け目などに両性雌虫を産み付けます。この両性雌虫は1卵を宿したまま樹皮に固着して死亡します(写真3、4)。



写真1 虫えい

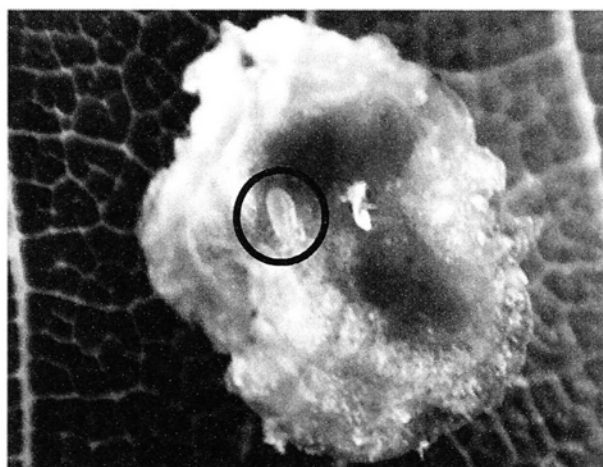


写真2 虫えいの中の無翅雌



写真3 幹に群がる有翅虫

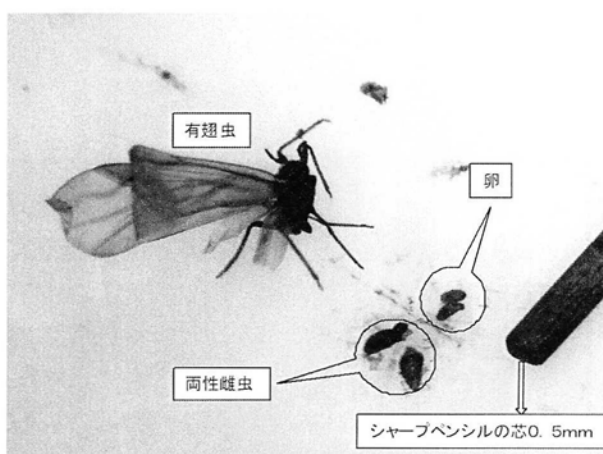


写真4 有翅虫・両性雌虫・卵

参考文献

- 秋元信一 (1991) ケヤキに虫こぶを作るアブラムシの生態と分布 森林保護
小林富士雄・竹谷昭彦(編) (1987) 森林昆虫 養賢堂

[北海道外来樹種物語]

シンジュ（神樹） *Ailanthus altissima* ニガキ科

真田 勝（8期）

シンジュは中国原産の落葉広葉樹で、標準和名はニワウルシですがシンジュの名の方が馴染まれています。雌雄異株の高木で胸高直径1m、樹高25mにも達します。葉は互生、奇数羽状複葉で極めて大きく、長さが50～90cmにもなる葉をつけ、直幹性で枝数は少なく、成長は旺盛でとくに初期成長がきわめて早い樹種です。

中国では「樗樹」といい、「樗」は役に立たない、余計者の意でシンジュは大きくなるばかりで何の役にも立たない不良木とし、また若い枝葉を揉むと悪臭があることから「臭樗」と呼ばれています。ちなみに明治の文豪、高山林次郎の雅号「樗牛」は役に立たない牛の意のようです。

シンジュの名の由来は複雑で属名 *Ailanthus* の語源に関係する。*Ailanthus* は、インドネシアのモルッカ諸島に分布するモルッカシンジュ (*A. moluccana*) の現地名 *ailanto* にちなみ、*ailanto* は「天の木」と訳されたが、実際には天にも届くほど高くなる木と軽い意味であった。この仲間がヨーロッパにわたり「ツリー・オブ・ヘブン（天国の木）」と英訳され、さらにドイツにわたり「ゲッターバウム（神樹）」となりました。本来アイラントに神の意味はないのに伝言ゲームのように意味が転じて、役に立たない「樗」が「神の木」シンジュ（神樹）となったと言われます。また、ニワウルシは葉がウルシによく似て庭植えられる木の意味で、ウルシの名は付くがかぶれることはありません。

日本に入ったのは中国から直接ではなく、明治のはじめウィーン万国博覧会に派遣された農学者の津田仙氏ら一行が、現地の街路樹を見て感心し、ニセアカシアなどと共に種子を採取して持ち帰ったのが最初で、東京丸の内周辺に街路樹としてわが国に初めて植えられたといわれます。また、養蚕にも使える有用な樹種であると宣伝し、戦時中はシンジュ蚕を広めるため主要都市にシンジュの苗が配給されました。札幌にも割り当てられ、全国各地に広まりました。

北海道におけるシンジュの植栽は、明治14年（1881）に開拓庁が札幌円山養樹園でシンジュの種をまき、500本の養成苗を札幌および本庁管下に払い下げた記録があります。その後、旧札幌市および近郊で植栽されたシンジュの生育成績が昭和23年秋に松井らによって、豊平町経王寺境内、北5条西8丁目の伊藤組庭園、北大農学部苗畑、道路並木など10箇所が記録されています。その中で最も古く大きいものは経王寺のもので5本植栽されており、昭和23年の調査では推定樹齢68年、胸高直径45～83cm（平均60.9cm）、樹高15.0～16.5m（平均15.8m）と記録されており、推定樹齢から円山で養成された苗木であろうと推察され、札幌で最も大きいシンジュとされていました。しかし、現在（2014年調査）では、境内には2本のみで、1本は隣接のイチョウと共に札幌市の指定樹木になっていますが、2本とも直径50cmに満たないもので往時の巨木は見当たりません。

役に立たないと言われるシンジュですが、適応性が広く、成長が早いことから街路樹や

砂防造林などに植栽され、またシンジュの葉を好んで食べる蚕、シンジュ蚕が有望となり、シンジュの造林が勧められました。播種、根分け、挿し木などによる育苗法からシンジュ蚕用採葉林の造林法など、林業試験場できめ細かな研究がなされました。また、北海道大学ではシンジュ蚕の研究がおこなわれ、その名残かキャンパス内にはシンジュが多く見られます。繁殖力が強く、毎年多くの種を实らせ、鳥や風によって散布されて雑草のように繁茂するため、大学では大々的な稚樹の駆除作業が時折行われているようです。



シンジュサン（ヤママユガ科）終齢幼虫

材は木目明瞭な環孔材で、色は白く、見た目は良いが変色しやすく、硬いが脆く狂いやすい。また薪炭材としても火力が弱いことなどが中国で悪木あつかいされた所以かと思われます。日本でも成長が早いことから有望と考え、用途の開発を試みましたがこれといった用途が見つからず造林されることはありませんでした。



昭和17年（1942）頃に植えられたシンジュ並木（帝室林野局北海道林業試験場時代 現豊平公園）

導入当初は札幌でも南4条通りや一条橋付近、北8条通りなどの街路に植えられ、1988年頃の市内には国道も含めて1,681本ありましたが腐朽や風倒などで激減しています。

1989年に危険木として伐採した南4条通りのシンジュには除雪作業によると見られる傷やベッコウタケ、エノキタケ、ツガサルノコシカケ菌などによる材腐朽があり、大きな空洞化も見られ、数本伐採されました。

狭い道路には大きくなりすぎて困る樹種で、新たな植栽は少ないが河川敷や空き地にはいつの間にか生えて大きくなっているものがよく見かけられます。不要であれば早期に処理されることが望ましい。

参考文献

松井善喜他：シンジュの造林について、林業試験場彙報 1951、北方植物園：朝日新聞社 1968、世界の植物：朝日新聞社 1978、村野紀雄：札幌の並木 1982、札幌の街路樹：札幌市 1988、真田勝他：札幌市内における衰退街路樹の舛内土壌について、日本林学会北海道支部論文集 1990、北大構内の樹木：日本木材学会北海道支部 2012、など

極めて早い里桜の生長と大きく育った桜の行く末

グリーンコンサルタント緑の研究所 金田 正弘 (11期)

1. 試験的に里桜の苗木を植栽



植栽時の記念写真 (2009年4月25日)

左の写真は7年前に枝垂性の里桜の小さな接木苗 (1年生H=1.2m) を植栽し、ご家族の方と記念に撮影した1コマです。

苫小牧市内在住の0さんとは、市内大手企業の緑化指導を行っていた時、同じ総務課緑化担当として勤務していた間柄でした。偶然でしたが0さんのお父さんは同じ町内で造園業を営み、知っていたこともあり、より親しさが増したようです。

小さな庭のスペースには木が一本もありません。

家の周辺に桜を植えるとやがて大きくなり大変なことになる、とも思いましたが、桜の開花を見たいとの強い希望もあり、この後2本のサトザクラの苗木を追加植栽しました。

その後0宅には2人の男の子と待望の女の子 (小鈴ちゃん) が誕生し、桜の苗木にも名前を付けてご家族みんなで大切に手入れをしていたようです。

2. 近所で評判の桜になる



里桜の開花 (2012年5月18日)

企業の緑化指導 (週1回のアルバイト) を続けている中で、0宅の苗木の生育が思わしくない話を聞き、あまりに小さな苗木で申し分けなく思っていました (状況の確認はしていた)。

植栽3年後の5月、きれいに咲いていると言うことで見に行った時の画像です。小鈴ちゃん誕生記念の里桜がH=1.5mを越えた高さに伸び、数えられる程の花が咲いていました。この桜が早咲きで、次に枝垂性の里桜、最後に遅咲きの花笠 (ハナガサ) が咲くようです。

住宅の向いには児童公園があり、多くの人達が通ります。近所の人たちにとっては見たことのない不思議な桜のようでした。

苫小牧市内の桜は、蝦夷山桜が大半で、千島桜が少々、里桜と言えば染井吉野か八重咲きの関山で、これらの花が不思議に見えたのもうなずけるところです。

3. 見る見る生長していった里桜



5年後の里桜 (2014年5月12日)

5年目をむかえた0宅の里桜を觀賞しているところです。小鈴ちゃんは保育園に行くようになりました。開花の様子を説明しているのは兵庫県の桜研究家、鶴田誠氏です(樹木医11期の同期で私の桜の師匠です)。

この頃から桜の枝が道路に伸びるのが目立つようになってきました。樹冠の枝葉が最大の時期には道の曲がり角が見えづらくなりました。

私は2013年1月に企業の緑化指導を退任し、同時に0さんも別の職場に移動していました。

4. 移植已む無しの決断



根回し前の3本の桜
(2015年7月2日)

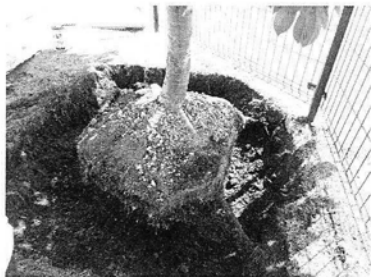
この写真を見るまでもなく、2014年の段階で里桜の生育が限界であることがわかっていました。

当初、男の子が通う近くの小学校に移植しようと言う話でしたが校舎建替え工事等で断念しました。家族全員で6年間お世話をしていた事もあり、このままの姿でいつでも見に行ける広い場所がないだろうか考えました。近くの樽前山神社がどうかということになり、0さんの努力で移植しても良いとの了解を取ることに成功しました(移植場所の下見もしていました)。

里桜は大きな桜に生長しています。これを移植するには長く伸びた太い根を短く切断しなければなりません。当然、枝葉を半分以下に切り詰めなければ移植不可能になります。家族や近所の人気になっている桜をそのままの姿で移植できないだろうかということになり、「林試移植方法」を行う決断をしました。

5. 林試移植法を応用した桜の根回し作業 (2015年7月)

2015年秋に移植する可能性があり、根回し後の新根発生期間(4ヶ月、120日)を考えると、7月上旬に根回しを終えるのがリミットでした。3本の里桜の根回しを3回に分け、それぞれ7月2日、6日、10日のあいた時間帯での作業となりました。以下「林試移植方法」を応用した根回し作業の手順です。



①根掘り



②残した太根



③小刀による削り



④環状剥皮



⑤根鉢の掘上げ



⑥オキシベロンの塗布（基部）



⑦トップジンMペースト塗布



⑧仕切り材と混合土の充填



⑨根回し完成

庭の構成は、3本の桜と管理された美しい芝生です。そのため、掘削は人力で行いました。元々周辺の住宅地は広い工場跡地を埋め立てた場所です。根系は苗木植栽時の地ごしらえ域から堅い基盤に伸長し、人力掘削を困難にしていました(①)。太根3本を残し(②)、小刀で表皮の形成層を剥皮します(③～④)。さらに根鉢を掘りあげ、底が見えています(⑤)。剥皮した基部(根鉢側)にオキシベロン(インドール酪酸、発根促進効果)原液を塗布し(⑥)、残りの剥皮部はトップジンMペーストを塗布しました(⑦)。根鉢から幅5cm程外側に仕切り板(ヤシガラマット使用)を設置し、その間に混合土(礫、炭、ピートモス、パーライト等混合)を充填、周囲を埋め戻し、「林試移植方法」を応用した根回しを完成させました(⑧～⑨)。この後オキシベロン1000倍液を散布しています(樹冠部枝葉は一切剪定をしていません)。

6. 移植を待つ里桜



根回し当日小鈴ちゃんと記念撮影
(2015年7月2日)



紅葉期の里桜(根回し4ヶ月後)
(2015年11月5日)

小鈴ちゃん誕生記念に植えた中央の里桜は1mに満たない小さな苗木で、丈がほぼ同じだったのかもしれませんが、小鈴ちゃんもこんなに大きくなりましたが里桜の方は1年に1m以上伸長しているようです。手前の花笠にいたってはあきらめるしかない程の伸び方です。

接木1年生の里桜苗木は、植栽当初は生育が緩慢なもの、その後は驚くほど伸びることが証明できました。ただし、桜を苗木から育てるためには以下のような条件があることに留意しなければなりません。

- ① 植栽基盤を改良し、適期に植栽できた(4月末)
- ② 狭い庭ながら樹木は里桜3本だけしかなく、日当たりが朝日から西日まで十分当る環境だった。
- ③ ご主人に造園の知識があり、家族も熱心に手入れをした。
(水やり、風で倒れそうになった時支柱を付けた、毎年施肥をした、落葉片付け等)
- ④ 疑問点を桜の専門家に問い、指示を忠実に守った。
(勝手に枝切りしたりしなかった、肥料内容も考えた)
- ⑤ 自分達でできない枝切り等を専門家に頼んだ(芯止め、枝すかし、切りつめ剪定等)。
- ⑥ 近所とのコミュニケーションを取っていた。

さて、根回し4ヶ月後(120日後)に見た桜は紅葉の時期でした。早咲きの里桜は紅葉の最中で、遅咲きの紅笠は落葉していました。枝垂れ性の里桜はまだ紅葉前で緑葉が目立っています。いずれも根の切断にもかかわらず健全な状態です。根回しが上手くいき、すぐにでも移植可能な根鉢を形成していると思われました。

当方も忙しく、秋移植実施に声をかけるタイミングを逸してしまいました。さらに、大木に育ったサトザクラの移植にはフェンス越しに吊り上げるための重機も必要です。また、移植先(神社)の地権えをどうするのか、それらにかかる費用をどう捻出するのか現在思案中です。

市民による里山の森林調査に携わって

(一財)北海道森林整備公社 笠倉信暁 (21期)

きっかけ～森林ボランティアとの出会い

今から3年前、休日になるとどこからかチェーンソーの音が聞こえてくるのを不思議に思い、自宅近所の山に行ってみると、森林ボランティアの方々が広葉樹林の除伐を行っていました。チェーンソー他本格的な装備をした、男女あわせて10名ほどが一生懸命に汗をながしており、「へえーこんな活動をしている人たちが身近にいたんだなー」と感心しました。その後、何度か様子を見に行っているうちに山主の方に知己を得、気づくと会員になっていました。

森林ボランティアの紹介

このボランティアの名称は、「間伐ボランティア札幌ウッディーズ」といい、下草刈りや除間伐などの保育作業を中心に札幌近郊で精力的に活動をしています。会員の平均年齢は55歳。会員数は約70名と道内でも規模の大きいボランティア団体です。平成24年には、北海道社会貢献賞「森を守り緑に親しむ部門」を受賞しています。

会員の素顔

日常的に山仕事をしている自分からすると、休日にわざわざきつい労働をするとは、ちょっと考えられないことです。ボランティアの方々がどういった目的を持って活動しているのか興味を持ち話を聞いてみましたが、自然の中で仲間と汗を流し、それが身近な環境の保全につながるということに純粹に喜びを感じている方が多いように思いました。また、ほとんどの方は普段自然と関わりのない仕事をしている人たちですが、副産物の山菜や薪が得られたりするとモチベーションも上がるようで、レクリエーション感覚で楽しんでいる様子もうかがえます。

見えてきた課題

入会后、しばらく活動するうち、いくつかの課題が見えてきました。そのうちの 하나가、自分たちの活動している森林の林分内容がわからず、いきあたりばつりの施業を行っているということです。また、森林の範囲や境界もよくわかっていません。そのため「森林公園づくり」的な単なる修景作業、明確な目標のない施業が行われていました。

そこで私からこんな提案をさせていただきました。「森林の現況をできるだけ正確につかみ、それを元に施業の指針をつくってみませんか？そのための森林調査の手法を学んでみませんか？」と。そうしたところ、主な役員の方から「自分たちに足りないところだと感じていた」と、すんなり賛同を得ることができました。話によると、所有山林をどのようにしていけばいいのかという相談を外部からたびたび受けるものの、提案らしい提案ができないジレンマを抱えていたようで、何とかしたいという思いが以前からあったようです。

プロジェクト始動

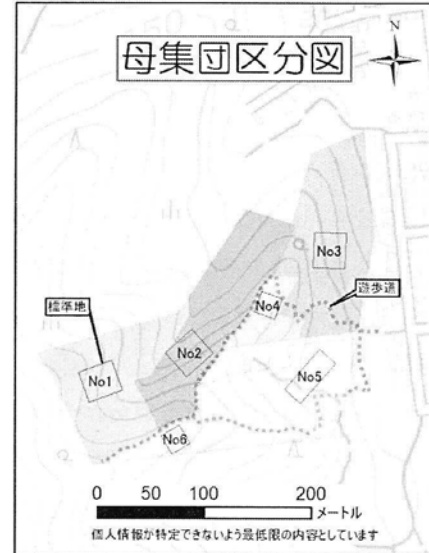
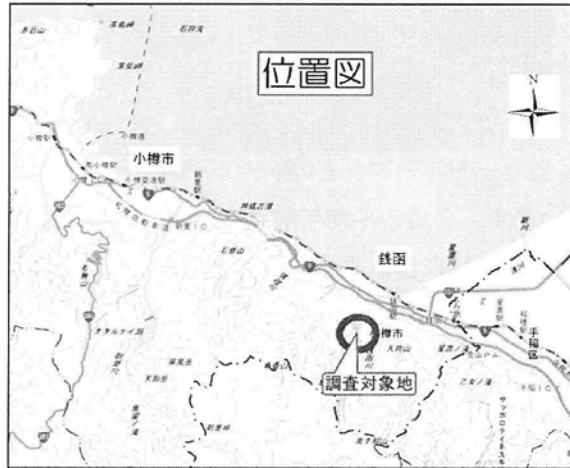
以上の経過から、平成26年12月、会内に森林調査ワーキンググループが発足し、私が講師役となり、モデル山林で月に一回程度活動を行うようになりました。

まず、現地調査に入る前に図面や森林調査簿、空中写真などから机上調査を行い、概況を森林情報カルテにまとめました。また各種計測方法、材積の求め方など、森林調査の基本についても研修を行いました。これら地道な作業にも関わらず、毎回10名ほどが参加し、皆一生懸命に耳を傾けてくれたのです。この熱心さに私も心を打たれ、この取り組みを継続していく際の前動力となりました。

その後、固雪になる3月からはフィールドに出て踏査をし、以降12月まで標準地調査を行いました。
(0.1ha*4箇所、0.04ha*2箇所)

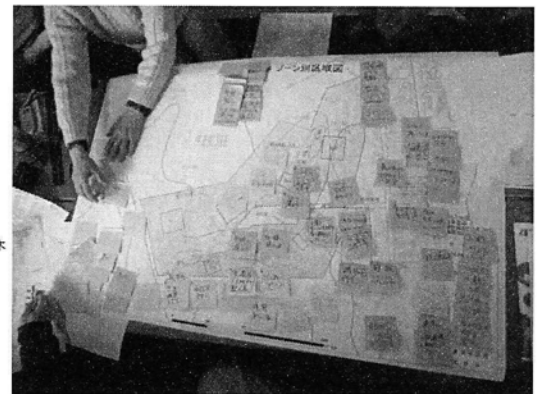
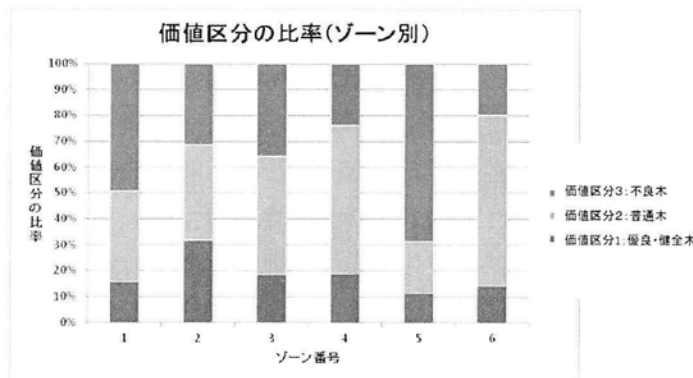
調査対象フィールドの概要

1. 場所：小樽市
2. 面積：約4.8ha（天然生林4.6ha 人工林カラ0.2ha）
3. 標高：180m
4. 傾斜主方向：NE
5. 平均傾斜度：25度
6. イタヤ、ミズナラを主体とした二次林で、一部60年生のカラ人工林を含む
7. その他：約500mの遊歩道が整備済みで、地域住民の散策路としても利用されている。一部住宅地に隣接。主要植生はクマイザサ。



調査結果要約（広葉樹・全林）

1. 平均直径：18cm
2. 平均樹高：12m
3. 本数：約1000本/ha
4. 蓄積：約200m³/ha



調査を終えて

調査結果については後日集計作業を行い、どの樹種が優先しているのか、林分のタイプや階層構造についてグラフなどに整理し分析を行い、林分の特徴をつかむことができました。そして、その結果をたたき台として、整備方針について意見交換を行うまでに至りました。意見交換では主にゾーン毎の特徴をそれぞれが出し合い、森林整備上の課題や制約事項、実現性など多種多様の観点から論議がされ、意見の対立もありながら一応、整備の指針の骨格をまとめることができました。ただし、この結果についてはあくまで机上の論議であり、現地に一度フィードバックして検証をし、納得がいくまで論議を重ねていきたいと思っております。

今後も、ボランティアの素晴らしい仲間達と励ましあい、楽しみつつ、継続的な活動となるようバックアップしていきたいと思っています。

学び舎の桜と私

顧問 鈴木 順策 (3期)

➡はじめに

平成 27 年 12 月 12 日、私は知床世界自然遺産の玄関口として、知床半島の基部に位置する「斜里町立朱円小学校」の閉校式会場に来賓として招かれた。

少子高齢化による児童数の減少等により、風雪 115 年の輝かしい歴史を刻んだこの小学校（卒業生 2,200 有余名）は平成 27 年度をもって閉校と決まり、隣接（市街地）する町立朝日小学校に統合されることになったためである。

しかし、私がこの会場にいること自体、この学校には思い入れがあるため、何か複雑な心境でもあった。

それは今から 18 年前（平成 9 年）の秋、当時の第 28 代校長元村経子氏から、この学校の桜園（面積 1 畝エゾヤマザクラ約 300 本）で生育する桜は「老木も多く、専門家による病害虫等の実態と今後の維持管理のあり方について」の意向打診があり、現地を下見するため、はじめて桜園に足を踏み入れた。それ以来今日まで、桜園の知床桜（エゾヤマザクラ）に軸足をおきながら、「樹守」や「森の案内人」として、ある時は「桜守」や「桜の名所づくりアドバイザー」の立場で関わり合いを持ち続けてきたからである。

➡朱円小学校閉校事業協賛会から感謝状

閉校式後、会場を変えて「思い出を語る会」が始まり、朱円小学校閉校事業協賛会々々から感謝状の贈呈が行われた。歴代校長 6 名・歴代 P T A 会長 6 名・歴代支援指導者 11 名である。が、歴代支援指導者のうち、私一人だけが学校教育活動発展のための「樹木指導」としての感謝状を頂いた。

閉校式で平野真奈美校長は「学校長謝辞」の中で、樹木医が長年桜園の保全管理に尽力したことに触れられ、学校長からの感謝状と思っていたが何か隔世の感を覚えた。

しかし、この日を重く受け止めながら、久しく会した歴代の校長の皆さんや P T A 会長さん達と語り合い、意義ある時間を過ごせたことは幸いであった。



春の朱円小学校
(平成 27 年 5 月 1 日撮影)
～5 月 3 日桜が満開～



夏の朱円小学校
(平成 27 年 8 月 13 日撮影)

㊦桜園は何故造成されたのか

この地に開拓の鋤を下ろし、学び舎の礎を築いた先人達は、桜園誕生秘話の中で「開拓し尽くされた農村地帯は春先の強い南風が吹き荒れ、農家の播いた種子が耕土諸共吹き飛ばされる年が続いた。家は土埃、外は黄塵万丈の嵐といった状況であった」と記されていた。この記述で造成に至る全てが裏打ちされている。

大正12年6月、第7代校長伊藤栄太郎氏を中心に先人達は、気象的立地条件の厳しい周辺環境から学び舎を守るため、校舎の正面南側に防風林としてミズナラ、ヤチダモ、キハダ、イタヤカエデなどの落葉広葉樹を移植した。

その後、林縁等に一部落葉広葉樹を残し、近隣国有林から許可を受けて山取りしたエゾヤマザクラに植替えられ、防風林を兼ねた桜園を造成したものである。

当時の造成技術は定かではないが、防風林造成技術としての防風林の影響範囲（樹高に比例して増加する）、風速の減少（防風林は正面から見て枝、葉、幹が林全面の60%前後の面積をおおっている最適密度くすき間が全面に細かく分散する40%前後の最適通風度）などと比較しても移植間隔約4mなど風害を意識した見事な取り組みであった。

また、岐阜県長良川上流の城下町跡の桜の名所で育った先人の一人は、「桜に対する愛着と郷愁（望郷）は人一倍強く、その思いが叶い、桜で彩る壮大な風景となった」とある。



秋の朱円小学校
(平成27年10月16日撮影)



冬の朱円小学校
(平成27年2月5日撮影)



知床桜放映後の記念写真
NHK「おはよう日本」で放映
(平成13年5月14日撮影)

㊦桜園保存整備事業（桜園概況調査）・桜園整備5か年計画

平成10年4月の人事異動で当該小学校も第29代校長（中川勝彦氏）に変わったが、早速斜里町教育委員会から調査依頼があり、エゾヤマザクラの生育状況の実態を調査することになった。従って平成10年度の調査は「桜園概況調査」とし、胸高直径30cm上の個体を対象に各種被害調査を実施し、一部別扱いとして落葉広葉樹の衰退木5本も含め111本を調査した。概況調査では、胴・枝枯性病害や老齡過熟木による材質腐朽病も多く、その

殆んどは、環境圧による風害に起因したものである。

以後平成 12 年度から 5 か年計画で被害程度区分に応じ、50 本前後の個体に必要な治療を施した。

確認した木材腐朽菌の菌種は、ツガサルノコシカケ、マスタケ（腐朽型：幹心材腐朽；褐色腐朽）、ナラタケ（腐朽型：根株心材腐朽；白色腐朽）、チャアナタケモドキ、カワラタケ（腐朽型：幹や枝の心材腐朽；白色腐朽）であるが、ツガサルノコシカケ、チャアナタケモドキ以外は夫々1 個体のみであった。

調査対象の個体は大正後期から昭和 11 年頃まで近隣からの山取り（天然下種更新による幼木）によるもので、幸いにも「てんぐ巣病」の発生もなく、遺伝子攪乱の心配はなかった。

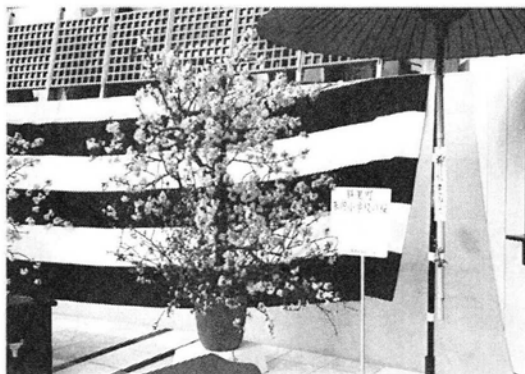
➡緑の教室「子ども樹木博士に挑戦」

平成 14 年度の学校教育法等の改正により「総合的な学習の時間」が設けられた。

これを機会に私（当時会長）の所属する「オホーツク森の案内友の会（ボランティア団体）」では、森林環境教育の一環として既に平成 14 年 9 月に津別町 21 世紀の森で第 1 回目の教室「子ども樹木博士に挑戦しよう」を開催していた。朱円小学校でも当時の学校長に趣旨を説明し、町教育委員会の後援を得ながら平成 17 年 7 月 16 日（土）、はじめてこの教室を開催した。隣接の峰浜小学校も含めて 26 名となったが教職員、保護者等 24 名も加わり 50 名の参加となった。

この緑の教室は、全国共通の認定基準によるものであるが対象樹木は 30 種類とし、野外での樹木観察後、室内で葉や枝の標本で樹種名を再確認しながら、樹木識別テスト（10 級～3 段）の順でおこなうものである。有段者の称号を目指す児童と「森の案内人」数名で平成 26 年度まで都合 6 回開催してきた。

多くの子ども達が森林の中で緑に触れ「自ら学び考えることの大切さ」を学んでほしい、と思いながら森林のもつ諸機能等を知るためのスタートとしての新しい取り組みであった。各学校長からは大変有意義で貴重な時間を過ごせた旨の礼状が届き、教職員皆さんの心温かい対応が忘れられない。



緑の教室一樹木識別テスト
「子ども樹木博士に挑戦しよう」
（平成 17 年 7 月 16 日）



第 27 回全国さくらシンポジウム in 北見桜園の知床桜
を桜守の活動の象徴として会場のロビーに飾った
（平成 20 年 5 月 10 日）

🔄桜園の環境整備

平成17年度から今まで、私は桜守の立場でボランティアとして休校日を選び、教職員とPTAの皆さん達と一緒に土壌改良、孔状面に桜の移植、枯れ枝の除去、枯死木等の処理、既治療木の補助作業等を必要に応じ、適期に年1回実施してきた。しかし、PTAの皆さんの職業は殆んど農業であり観桜を楽しむ暇がない。

桜の開花は農事期の始まりで、種蒔きなど多忙な時期になるからである。

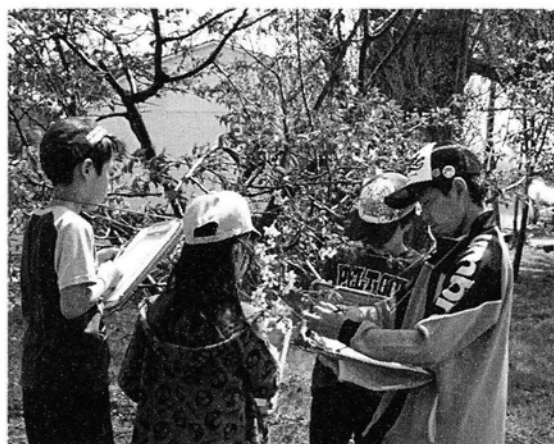
農耕の神「木花開耶姫」の神代の昔話を思い出すが、児童達はこの恵まれた桜園で、毎年恒例としてきた「お花見給食」も最後となった。が、いつまでも学び舎での心象風景の一つとして大切にしてほしいものである。



最後の環境整備（枯死木の処理）
（平成27年6月13日）

🔄学び舎の桜を救おうプロジェクト

平成24年9月1日、町立朱円小学校は、公益財団法人日本花の会から、学び舎の桜を救おうプロジェクトの対象として指定された。桜園を皆で美しい桜の再生を目指すためである。日本花の会の主任研究員と私で標準木13本を選定し、長谷川式土壌貫入試験（標準地3箇所）を施し、児童によるエゾヤマザクラの花芽調査を3年間実施してきた。この調査は児童たちがこの地方のエゾヤマザクラの健康状態（通常の生育状態）を勉強する総合学習の一環ではあるが、今後の貴重な資料として残してくれた。



児童達の最後の花芽調査
（平成27年5月7日）

🔄おわりに

桜園で咲く知床桜を通じて、第28代校長から第35代校長平野真奈美氏まで8人の校長先生と夫々の教職員の皆さんと出会い、PTAからは第34代会長から第41代会長鶴巻智也氏まで8人の会長と夫々の皆さんとも、縁があつて楽しく接することができた。

そして未来へと羽ばたきながら、桜園のある学び舎を巣立った児童達、その明るい笑顔などが懐かしい思い出として胸中を去来する。

先人が桜園について斜里町史に書き残した「今は近隣に名高きこの桜は、風害の痛ましき歴史の上に咲く花」と記されたその「咲く花」こそ、学び舎を風害から守るため汗した先人達の思いが凝縮された類稀な選るべき名言であった。

素晴らしい歴史を残した桜が満ちる名所として、桜を愛でる人々のために、いつまでも歴史の上に咲く花であってほしいと願うものである。

「恵庭市公園樹、街路樹シンポジウム 2015」に参加して

苫小牧造園共同組合 後藤 暁子 (24期)

昨年の秋に恵庭市の緑を考えるというシンポジウムにパネリストとして参加させていただきました。主催は恵庭市役所で、恵庭市が行っている緑地管理の現状と抱えている問題、今後どのように緑のあり方を考えていくかということ、コーディネーター、パネリストを招いて話し合い、市民に公聴していただくという内容でした。コーディネーター、パネリストには都市計画の専門家、緑で街づくりを推進している方、地元造園会社の方が選出されました。私のような未熟者がパネリストにと思いましたが、今回は女性でとの依頼が樹木医会にあったとのことで、私が引き受けました。

事前の視察、聞き取りでは、恵庭市は緑地管理の運営が市の規模に相当してほどよく行われており、正直、問題はないように思われました。市民も緑の維持管理や街づくりに町内会などを通して積極的に参加しており、地元の大学もボランティアを出すなど、緑を通してコミュニティができており、感心しました。どこの都市でも問題になる公園の落ち葉も町内で清掃、町内で利用し、さらに落ち葉清掃に励んだ方には市が表彰を行うという活動も行っているそうです。これほどに市民が日常的に緑に関心を持ち、自ら参加して行動するという所はとても珍しいことだと思います。他の都市がお手本にできる場所もあり、他の都市よりも進んでいるのではないかと感じたほどです。

当然ながら、シンポジウムに来場された市民の方々は、恵庭市の環境をもっと良くしたいと考えており、当日は11月の積雪という悪天候にもかかわらず、会場まで足を運んでくださった方が多かった事は、緑化に関して市民の意識が高いことの表れだと思います。

シンポジウムで行われた市民との意見交換でも、恵庭市民からは樹木医をぜひ恵庭市にも、また、樹木医からもっと多くの意見を聞きたいという声がありました。木を強く切っ欲しいなどのマイナスの声は届きやすく、実行も容易ですが、プラスの要素という点については発言する場もなく、多くの人に意見が届きにくいということがあります。恵庭市民はこういったことが、樹木医を介したなら、両方の意見を聞き、お互いの気持ちを知り、知識を深めあうことができるようになるのではないかと期待されていました。

私は昨年樹木医の資格を取ったものの、樹木医と名乗ると、樹木医とはなんですか？と聞き返されることが多く、北海道での認知度が低いことに驚き、名乗ることすらためらうようになっていたところでした。今回このシンポジウムの参加を決めたのも、こういった経験から樹木医を知ってもらおうという思いがあったからです。樹木医として、技術、知識を身につけていくのはもちろんのことですが、広報活動をして、まずは樹木医というものを知ってもらい、樹木医があたりまえになる、ここも大事なのではないかと考えるようになりました。

恵庭市民のように樹木医を知っている方々から見れば、(樹木医は)当然必要な存在であります。このことを再認識しつつ、樹木医の周知と資格取得者の増加に貢献できればと考えています。

広い北海道は他県に比べて樹木医のカバー領域が大きくなります。樹木医がいない地域にもどういった形で関われるのかを考えていかなければなりません。

札幌市における保存樹木の現状と安全対策

札幌市環境局みどりの推進部 佐々木 一良 (15期)

1. 保存樹木制度の経過

保存樹木の指定制度としては、昭和37年制定の「都市の美観風致を維持するための樹木の保存に関する法律」並びに昭和52年制定の「札幌市緑化推進条例」がある。我が国において昭和30年代は、池田勇人首相による高度経済成長の真只中であり、文化財保護法、都市計画法、森林法などがあったものの、市街地の大半の樹木がこれらの制度から漏れ、伐採を余儀なくされていた。札幌市においても昭和40年代からは宅地開発が急激に進み、冬季オリンピック以降の人口増加、都市の成長により緑が失われてきた。

このような社会状況を踏まえ、都市の健全な環境の維持及び向上に向け保存樹木の制度が整備された。札幌市においては両制度により、昭和43年からこれまで60本、12.2haが指定されている。

2. 保存樹木指定の基準

保存樹木の指定区域並びに樹木の大きさについての基準は次のとおり。

- (1) 都市計画区域内にあること
- (2) 文化財保護法、森林法、景観法で指定された樹木以外であること
- (3) 国及び地方公共団体所有以外の樹木であること
- (4) 樹木が健全で、かつ、樹容が美観上特に優れていること

単木では

- ① 1.5mの高さにおける幹周が1.5m以上
- ② 高さが15m以上
- ③ 株立ちは高さが3m以上
- ④ 攀登性樹木は枝葉の面積が30㎡以上

樹木の集団では

- ① 土地の面積が500㎡以上
- ② いけがきの長さは30m以上

3. 所有者への制限内容

保存樹木の所有者に対しては、以下の行為について届け出の義務がある。

- (1) 幹又は主枝の伐採又は損傷
- (2) 樹冠下における掘削、盛土等の土地の形質の変更

4. 所有者への援助内容

保存樹木の所有者に対する援助の内容は以下のとおり。

- (1) 所有者に対し1本につき1年5,000円、1㎡につき1年10円の援助
- (2) 保存樹木の健康状況の調査
- (3) 賠償責任保険への加入

5. 指定の状況

「都市の美観風致を維持するための樹木の保存に関する法律」に基づくものとして、月寒神社、相馬神社、琴似神社、諏訪神社、札幌護国神社、北海道神宮、雪印メグミルク(株)など 20 か所、44 本、34,515 m²。「札幌市緑の保全と創出に関する条例」(旧 札幌市緑化推進条例)に基づくものとして、北海道農業研究センター、手稲神社、篠路神社、雪印種苗(株)など 15 か所、15 本、87,740 m²。合計、35 か所、59 本、122,255 m²となる。

最近の指定事例としては札幌市豊平区に存する経王寺のイタヤカエデ(写真1)がある。このお寺は明治8年に建立され、その当時の樹木がそのまま存置されている。高さ15m 幹周2.48m、枝張り15m×15mの大きさは市街地のイタヤカエデとしては貴重な存在である。指定にあたっては一般財団法人北海道森林整備公社の村木氏、阿部氏、今田氏に樹木診断(写真2)をお願いし、健全であるとお墨付きを得ている。



写真1 イタヤカエデ



写真2 診断の様子

6. 保存樹木の安全対策

最初の保存樹木指定から約50年が経過した。指定の際に、樹齢100年としていたものも、すでに150年経過したことになる。万が一のために賠償責任保険には入っているが、これまで安全性について十分把握してこなかったのではないかと感じる。国の特別史跡・特別天然記念物の日光杉並木が台風で折れ、自宅が損壊した訴訟について請求通りの賠償が認められている例がある。札幌市においては台風時(警報発令時)に街路樹が倒れ、民家に被害を与えることがあったとしてもこれまで補償した例はない。唯一、樹木診断により危険木と判断されて、台風到来まで伐採処理が間に合わず、被害を与えた場合に賠償を行っている。日光杉並木の例では所有者である東照宮に対して木槌による点検など被害予防の措置を取ることも命じている。

判例に倣えば札幌市においても何らかの予防措置を講ずる必要が出てくる。現在行われている予防措置としては、職員による年1回の見回りと一部の樹木診断である。樹木診断費用についてはレジストグラフによる精密診断を行うと1本約10万円の費用が必要となる。単木としては60本程度であるが、樹林として指定している部分を含めると市内で1,000本以上あり、現在の予算では10年に1回などの定期的な診断は難しい状況である。

せめて見回り際には簡易な外観診断のチェックリストを作成し、記録していく必要がある。見回りを継続していく中で専門家の意見が必要な際は、これからも積極的に樹木医を活用していきたい。私自身も資格を活かした仕事に従事して地域のみどりを見守っていきたい。

誰が守るか保存樹木

真田 勝 (8期)・阿部 正太郎 (12期)

村木 達男 (21期)・今田 秀樹 (25期)

平成 27 年 9 月道東の厚岸町に出向くことになった。釧路管内には巨樹・名木などの指定木が少ないが厚岸町には 4 件もあり、なかでも国泰寺の「老桜樹」や「色古丹松」が有名で一度は見たいものだと思っていた。幸い仕事は順調に進み見聞する時間もでき、せっかく来たので樹体を計測してみた。それと言うのもこれまで発行されている出版物の値と比較してみたかったからであった。

これまで北海道の名木にかかわる調査・取りまとめられた本は 3 回刊行されている。すなわち 1 回目は昭和 8 年 (1933) 9 月に「北海道の名木美林」附-優良防風林並屋敷林-が北海道林業会から発行され、2 回目は開道百年を記念し、昭和 43 年 (1968) 9 月に北海道百年記念「北海道の名木美林」が北海道から発行された。3 回目は平成 5 年 (1993) 2 月に「北海道の巨樹・名木」として (社) 北海道国土緑化推進委員会から発行され、おおむね 25 年間隔で発行されている。これらの資料を基に厚岸町の指定保存木について比較検討してみた。

上記の過去の資料と今回の測定結果を表-1 に示した。

表-1 保存木の測定一覧表

樹種 所在地	測定項目	測定年				備考
		1933 (S8)	1968 (S43)	1991 (H3)	2015 (H27) *	
エノヤマザクラ (老桜樹) 厚岸町国泰寺	樹高 (m)	9.1	17.0	9.0	2.1	・雪による枝折れ (2015)
	胸高直径 (cm)	70.7	69.0	84.7	93.0	
	幹周り (cm)	222	201	266	292	・史跡 (国指定) ・天然記念物 (厚岸町指定)
	枝張り北 (m)				10.4	
	南 (m)				5.6	
	東 (m)				—	
	西 (m)				—	
	推定樹齢 (年)	約90余年	130年以上	160年		・天保元年 (1830) 松前か石巻から移植
植栽後経過年数	103	138	161	186		
グイマツ (色古丹松) 厚岸町国泰寺	樹高 (m)	①10.6 ②6.1	17.0	11.0	12.0	・史跡 (国指定) ・天然記念物 (厚岸町指定)
	胸高直径 (cm)	②50.2 ②43.4	42.0	61.7	70.5	
	幹周り (cm)	③158 ②136	131	194	221	
	枝張り北 (m)				5.9	
	南 (m)				7.6	
	東 (m)				9.5	
	西 (m)				4.8	
	推定樹齢 (年)	約130年	約200年	190年		
植栽後経過年数	135	170	193	217		
スモモ (鉢植えの李木) 厚岸町国泰寺	樹高 (m)		13.0	8.0	7.6	・二股
	胸高直径 (cm)		40.0	42.0	南44.5・北47.0	
	幹周り (cm)		126	132	140・149	・史跡 (国指定) ・天然記念物 (厚岸町指定)
	枝張り北 (m)				3.6	
	南 (m)				3.8	
	東 (m)				2.4	
	西 (m)				3.0	
	推定樹齢 (年)		150年以上	190年		・文化2年 (1805) 仙台藩の鉢植えを移植
植栽後経過年数		163	186	210		
イチイ (逆さ水松) 厚岸町オンナイ	樹高 (m)	6.1	8.0	8.0	測定せず	・約300年前、戦いで倒れた アイヌ老婆の杖が根生えた との伝えあり。 ・天然記念物 (厚岸町指定)
	胸高直径 (cm)	77.0	70.0	94.3		
	幹周り (cm)	242	220	296		
	推定樹齢 (年)	約500年	300年以上	300年		

*今回 (平成27年9月16日) の測定結果

なお、昭和 8 年の数値は尺貫法の表示をメートル法に換算した数値です。

1. 国泰寺の老桜樹（エゾヤマザクラ）

来歴を看板を見ると、天保元年（1830）奥州石巻から移植されたと記されているが昭和8年の「北海道の名木美林」では松前からとなっていて、後に訂正されたものと思われる（写真1, 2）。植栽年がわかっているので、あとは何年生の苗を植えたかであるが推定樹齢に差異がみられる。

その昔から有名なサクラなのでそれなりの樹形をしているものと期待して行ったが、目を疑うほど衰れた姿になっていた。幹は2mほどの高さで切られ、ちょうど人が両手を横に伸ばしたような形となっていた（写真3）。昨冬の雪で折れてしまったそうで申し訳ありませんとのこと。

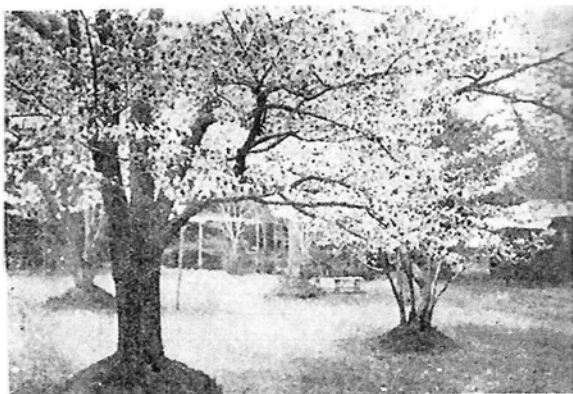


写真2 昭和8年頃の国泰寺のエゾヤマザクラ

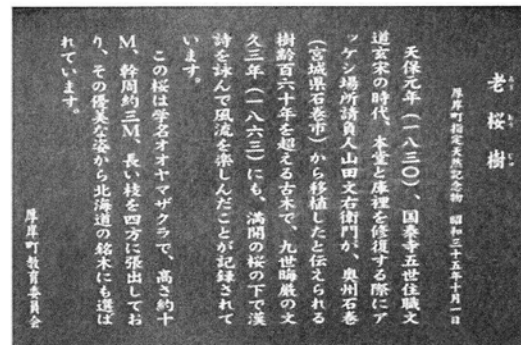


写真1 老桜樹の看板



写真3 衰れた現在の姿（2015.9.16）

130年以上経った昭和43年頃には樹高17mに達し繁茂していたが順次衰退し、平成3年には9mとなり現在に至っている。その大きな原因は老齢化に加え周囲の環境の変化、つまり他の樹木による被圧の影響が大きいと考えられる。現在は根株腐朽がかなり進んでおり、樹勢回復は困難な状況となっている。

2. 国泰寺の色古丹松（グイマツ）

エトロフ島より移植されたというグイマツ（写真4）は2本あり、どんな大きさの樹を植えたのか不明であるが昭和8年の資料では1号木と2号木で樹高は4mの差があり、現在も大小の2本が立っている。

昭和43年の資料では樹高17mまで成長していたが平成3年の資料では11mとなっており、幹の上部が折れたものと思われ、その痕跡が残っている。いずれも大きい方の1号木の測定値で、今回は樹高12m胸高直径70.5cmと測定された。

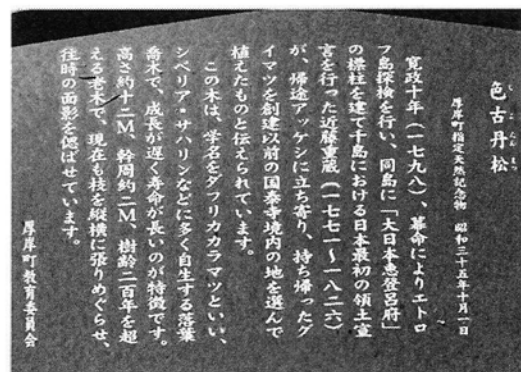


写真4 色古丹松の看板

グイマツは下枝も枯れずに長く伸ばす性質があるが、枯れたのか、雪折れでもしたもののか、かなり上部まで枝が切り落とされ、グイマツらしくない樹形となっている。今回も折れて繋り枝しているのが見られた。一見正常に見えるがよく見ると短枝のみで長枝がほとんどなく、伸長成長が極めて小さいようである。直径成長はそれなりの成長が見られるが樹高成長はきわめて小さいようだ。

古い写真(写真5)と比較(写真6)してみると、当時は根元まわりが雑草に覆われて柔らかい土壌のように見え、樹体はすでに100年を超えているが生き生きとした感じがする。

今は根元まで舗装道路で覆われ、周りもコケや痩せた芝で土壌も硬くしまり、生気を感じとれない状況となっていた。

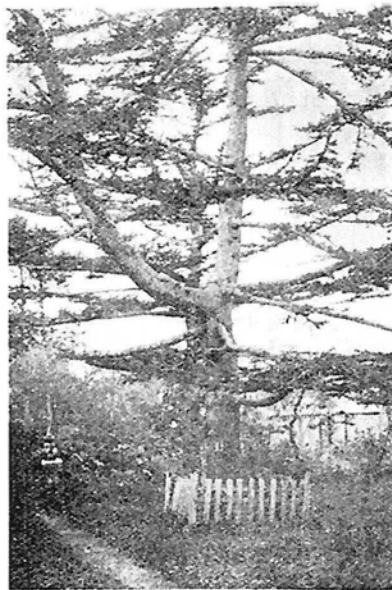


写真5 昭和8年頃のグイマツ

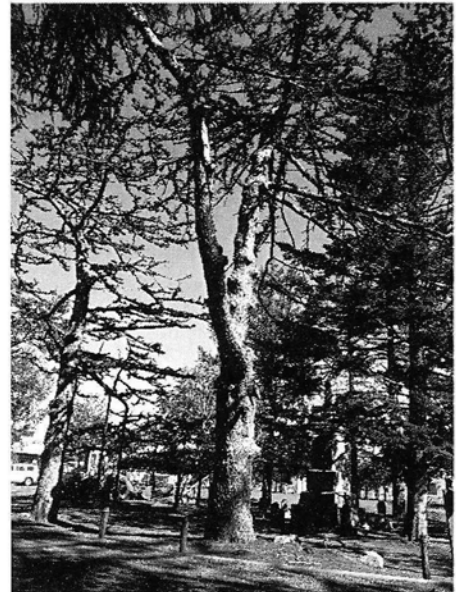


写真6 下枝のない現在の樹姿
(2015. 9. 16)

3. 国泰寺の鉢植えの李(スモモ)

文化2年(1805)奥州仙台藩からスモモの鉢植えをいただき、数年後に地植えされたと言われるもので200年を超える二股のスモモの大木である(写真7)。今でも花が咲き、実をつけ続けているが、剪定などの手入れ不足で枯れ枝や弱い枝が混み合っって病虫害が見られる(写真8)。

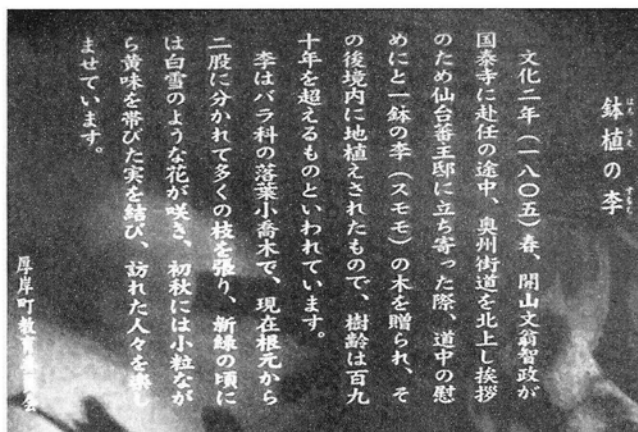


写真7 鉢植えの李の看板



写真8 鉢植えのスモモ
(2015. 9. 16)

4. 逆さ水松（イチイ）

厚岸湾を一望できるオソナイ山の道有林に所在するイチイで、「その形状恰も根を上にしたるが如き枝振りをして世人呼んで逆さ水松といふ」と昭和8年の資料に記されており、なるほどと思わせる樹形である（写真9）。しかし、現在は写真10のように元の幹や枝が枯れ朽ちて樹形は崩れ、再生した枝葉で生き延びていた。幹の空洞も大きく、周囲のカラマツ造林木やカンバなどに被圧され弱々しい樹勢であった。根元にはエゾシカによる食害防止用に柴木が巻かれていた。

昭和8年の記載で推定500年とし、「半枯れ状態であるを遺憾とす」と記されており、枯れ枝が多く写されている。現在のは二代目の樹姿であろうか。

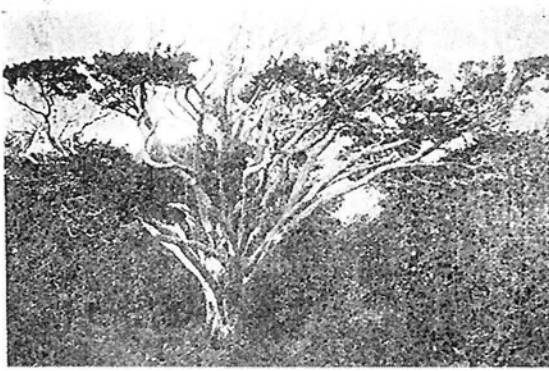


写真9 昭和8年（1933）頃の逆さ水松の樹姿



写真10 現在の樹姿（2015.9.16）

厚岸町にある4件の保存木はいずれも樹齢200～300年の古木であり、かなり老化が進んでいるが、もう少し手を差しのべてあげれば樹命を伸ばすことが出来るのでは、と考えさせられた。

しかし、誰が保存木を見守り保存するのか、所有者なのか指定者なのか。聞けば国泰寺の住職は昨年（H26年4月）境内の清掃中、不慮の事故で亡くなられたとのことで住職不在となっているようで管理が心配される。

表-1に見るように古い記録が残されていることは大変貴重であり、あり難いことであるが3冊ともいつ測定したのか、いつ頃写した写真なのか、調査・撮影の年月が不明なことは誠に残念でならない。どうしたことか全国にある巨樹・古木に説明板などが立っていても、来歴や樹高・幹回りなどは記されているが、調査測定の年月が書かれているものはほとんど見られない。そのため、出合った巨木などを測定して見ても、成長の程度が分からずあまり意味がない。

後世に残す記録として、誰でもわかるように年月だけでなく、測定方法や推定樹齢の根拠などすべての情報を記録しておくべきと考える。3回目の刊行からすでに25年を経過した今、これまで記載されていない新たな巨樹・巨木を含め、最新の技術情報を駆使し、何時、誰が、何処で、どんな方法で調査記録したのか、位置情報報なども含め、責任ある記録を後世にのこすために全道の樹木医の皆さんの協力で4回目の出版が出来ないものかと願っている。

「哲学の木」伐採事件で思うこと

もしも賢治が樹木医であつたら・・・

吉田 憲一（7期）

1 事件発生

2月下旬、ある新聞記事が目に入った。見出しには『「哲学の木」苦渋の伐採』とあり、仕事柄どうしても目に入ってくる。その内容を以下に紹介する。主語は所有者である。

《記事1 平成28年2月26日 朝日》

『「哲学の木」苦渋の伐採 北海道・美瑛 老化で危険、観光客マナーも一因』

—北海道美瑛町で「哲学の木」として観光客や写真愛好家らに親しまれてきた大きなポプラの木が24日、切り倒された。私有地の畑の中に立っていたが、老化に加えて、無断で入り込むなどマナーの悪い観光客らが増え、所有者の農家が決断したという。広くなだらかな畑の中に1本だけ立ち、何かを考えているかのように斜めに傾く姿から「哲学の木」と名付けられた。音楽グループ「ゆず」の映像作品にも使われたこともある。

関係者によると、老木となって枝が落ちたり倒れたりする危険があつたうえ、観光客らに畑を荒らされる被害がなくなることが背景にある。所有者は立入禁止の看板などで注意を促し、数年前からは木の幹に×印をつけて撮影禁止にした。町も観光スポットのリストから外し、観光アドバイザーに巡回してもらうようにしたが、注意をしても無視するなどの行為が少なくなかったという。美瑛の観光客は、これまで年間130万人前後で推移してきたが、外国人観光客の増加もあって2014年度は過去最高の179万人に達した。他の観光スポットでも迷惑行為が増え、問題になっているという。所有者の友人で、伐採にも立ち会ったという写真家のNさんは「伐採が一番つらいのは所有者本人だろう。美瑛の景観は、農家の日々の営みによって守られてきた。観光客や写真家は、その営みをそっとのぞき見させてもらっているのだということを忘れないでほしい」と話している。—

《樹木医の推理1》

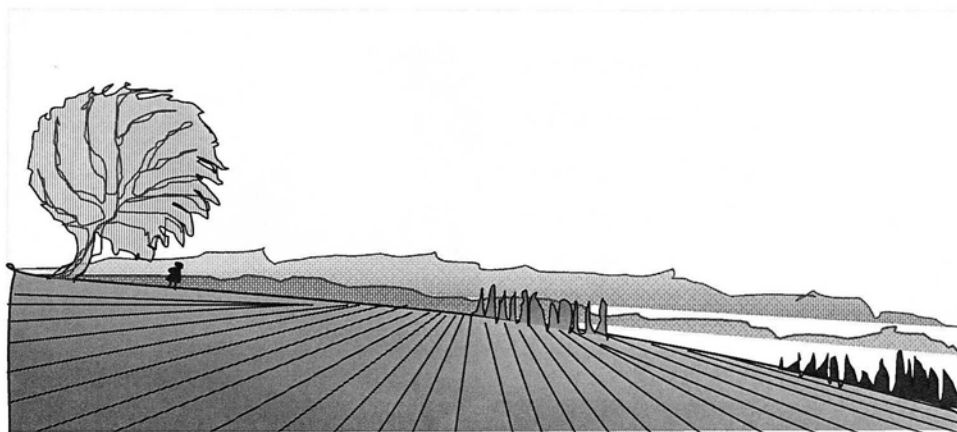
直接見たことがないので写真からの判断だが、樹高、葉張ともに17～18m、胸高直径1.0～1.3m、幹周400cm程度のギンドロ（ウラジロハコヤナギ）であろうか。推定樹齢80～100年。夏期成長期の南風を受けて主幹は北側に15～20度傾斜している。十勝連峰に源を発する美瑛川の流れに沿って北側へゆっくりと下りていく丘陵地形が、主幹傾斜を後押ししている風だ。根元に傷・腐朽は見られず、樹冠は孤立木特有のボリューム豊富な円形で安定している。写真判定では文句なく「健全木」レベルで、傾斜を考慮しても「ほぼ健全」クラスとなる。記事の「老化で危険」は正確にいうと「樹冠内部の枯死枝、一部先枯れの折損落下」の危険（可能性）有り、程度であろう。『関係者によると、老木となって枝が落ちたり倒れたりする危険があつたうえ、観光客らに畑を荒らされる被害がなくなることが背景にある』とあるが、どうやら所有者が伐採決断に至った主因はここにありそうだ。『数年前から木の幹に×印をつけて撮影禁止にした。町も観光スポットのリストから外し、観光アドバイザーに巡回してもらうようにした』とあることから、所有者は農作業の支障という点で衝動的に軽い気持ちで伐採したわけではなく、町との話し合いはもたれていたが問題解決には至らず、「堪忍袋の緒が切れて」伐採した様子がかがえる。

翌日、次の記事が同じ新聞に掲載されていた。先の記事に慌てて追いかけているような雰囲気を感じる。主語は美瑛町となっている。

《記事2 平成28年2月27日 朝日》

『名所の樹木維持、補助へ 美瑛町』

—美瑛町は、観光名所の樹木や建物の所有者に、維持・補修費用を補助する制度を導入する。26日発表した新年度当初予算案に事業費196万円を盛り込んだ。観光名所の樹木などは大半が私有地内にあり、所有者の負担で維持されてきた。近年は観光客が畑を踏み荒らすなどの迷惑行為が増えて所有者の負担感が強くなっており、24日には「哲学の木」として知られたポプラが切り倒された。町は昨年、良好な景観に必要な樹木や建物について、所有者の同意を得て「景観重要樹木」「景観重要建造物」に指定できるとする条例を施行した。新年度からは対象物件の所有者に年3万円を支給し、さらに枝払いや施肥、修繕の費用なども支援する予定だ。—



2 ほんとうの解決策は？

《樹木医の推理2》

この記事は26日付けであるが、伐採は二日前の24日である。この「哲学の木」は昨年「景観重要樹木」に指定されていたのだろうか？「事業費196万円補助」は伐採（所有）者に伝えられていたのだろうか？伐採に至った経緯は二通り考えられる。

- ①伝わっていたが納得出来なかった。
- ②伝わっていなかったが予定通り伐採した。

町と所有者は以前からこの件について話し合いが持たれていたことから、所有者がこの制度導入を知らないで伐採したとは常識的に考えにくい。ということは、伐採の主たる理由は金銭的な問題ではないことがわかる（少なくともこの事業費レベルの金額）。「富良野」に続いて「美瑛」の名を全国区にした「哲学の木」。話し合いの決裂、そして観光客や写真愛好家の人口圧の増大による所有者への精神的圧迫。町から所有者への解決策は「補助金」以外にはなかったのか？第三者的には、今回の衝撃的な事件でメリットを受けるのはどちらでもないように見える。「負の根」はさらに深くなっていくのであろうか。お互いウィンウィン関係の解決策はなかったのであろうか。それにしても、たかがポプラ1本されど1本であるが、とてつもなく大きく深い木の存在価値を再認識させられた事件であった。

宮沢賢治の童話「銀河鉄道の夜」の舞台ともなった北海道の広い大地。彼の作品の中に「植物医師」という戯曲があり、農民相手に作物の診断治療の様子がコミカルに描かれている。「植物医師」は今の「樹木医」に通じるとして、哲人賢治なる「植物医師」に是非この問題の解決策を聞きたいものだ。

「ケンさん、なしたらよかったべか」と。

日本樹木医会埼玉大会に参加して

真田 勝（8期）

平成27年度 定時社員総会がさいたま市の「大宮ソニックシティ」で6月5日に開かれ、全国から359名、北海道支部から3名の参加のもと開かれました。

会場は交通の至便な大宮駅に隣接する県内最大級の会議場を有する「大宮ソニックシティ」で、隣接の鐘塚公園では高所作業車を使いケヤキの剪定が行われていた。興味深く剪定の様子を見ながら会場に向かった。

受付ロビーでは「ポスターセッション」が開かれており、11枚のパネルが展示され各支部の活動状況や調査、治療の経過などの説明、解説意見交換でにぎわっていました。北海道からも展示参加できればいいなと強く感じた。

10時30分から理事会が開かれ、本日の提出議案の確認、議事運営などについて話しあわれた。午後1時から社員総会開会、会長の挨拶のあと表彰式があり、本会運営に貢献された会員32名（北海道支部3名）に感謝状と記念品が贈られた。その後議長を選出し議案審議、質疑応答後原案通り可決終了した（詳しくは「日本樹木医会ニュース」104号参照）。

記念講演会では地元埼玉県出身で県発展に尽力し、本道にも幾多の足跡を残され、林学の祖と呼ばれた本田静六博士について、東京大学大学院教授の下村彰男氏よりその業績が解説された。また、埼玉は盆栽でも有名で盆栽村や盆栽美術館などがあります。大宮盆栽美術館学芸員の田口文哉氏からは盆栽の見方や歴史についてお話をいただいた。

樹木医事例報告ではさいたま新都心の「ケヤキのひろば」について、梶川昭則、前田正明両樹木医より植栽15年後の経過が報告された。この「けやきひろば」は地下1階が駐車場、地上1階、3階は商業スペースで2階が「けやきひろば」となっており、地上7mの人工地盤の上に樹高8mのケヤキ220本が6m間隔で「空の森」をテーマに植え付けられたものである。屋上緑化のようなもので、その構造や植栽技術には目を見張るものがあるが莫大な経費を要したであろう。北海道では到底考えられないし、市民も許さないであろう作品と思うと同時に、都会ではここまで緑に飢えているのかと考えさせられた。



高所作業車によるケヤキの剪定作業。左奥が会場

エクスカージョン

翌日は大宮盆栽村、盆栽美術館および明治神宮をめぐるエクスカージョンに参加した。参加者は47名あり、バスで盆栽美術館に向かう。館内が混み合うので二班に分かれて入館

となった。ちょうどサツキの时序でサツキ展が開かれており、ロビーでは大きなサツキの盆栽が歓迎してくれた。この盆栽美術館は日本を代表する伝統的盆栽文化の調査・研究を行うとともに、盆栽文化を広く世界に発信し、多くの人に親しんでいただけるよう2010年3月に開館した、世界で初めての公立の盆栽美術館といわれ、日本を代表する名品盆栽、盆器、水石、絵画、歴史・民族資料などが収集展示されている。



大きなサツキ盆栽に見入る会員

田口学芸員の案内で、展示されたサツキの樹形や花色などについて解説していただきながら美しいサツキの魅力を堪能した。また館内を出れば盆栽庭園となっており、松柏類をはじめたくさんの盆栽が展示され、しばし盆栽の世界に浸った。

さらに外に出るとそこは盆栽村のだ真ん中。庭いっぱいには盆栽を管理・陳列・販売している家が軒並み続いている。なんでも住民協約があるそうで、この村に住む人は、盆栽を10鉢以上持つこと。門戸を開放し、いつでも、誰でも（盆栽が）見られるようにしておくこと。他人を見おろし、日陰をつくるような二階家は作らないこと。家の囲いはすべて生垣にすること。などのおきてがあり、正に盆栽一色の村で、小さな鉢に老木をいきいきと育てる技術には驚かされた。

11時20分盆栽村をあとに東京新宿の明治神宮に向かう。昼食は車中で郷土色豊かな美味しい弁当を用意していただいた。

13時ごろ明治神宮到着、鬱蒼と茂る神宮の杜中の社務所講堂に集合し、神宮警備管理課勤務の田中昌之樹木医より、神宮の杜の造成経緯や現状についてお話をいただいた。神宮の杜は大正15年（1915）本田静六博士らの提言のもと武蔵野台地の生育条件に適う樹種、全国からの献木10万本など計12万本、常緑樹42種、落葉樹38種、計80種におよぶ多様な樹種を集め、150年後を想定して植えられた。100年の時を経て現在では極相林に達し、あたかも天然林の様相を示す大森林となっている。



園路に覆い被さる高木の危険な枯れ枝

都心の中にこれほど広大な森の存在は世界的にも珍しく、年間800万人以上の参拝者、來園者がある神宮は、まさに大都会の森として親しまれている。

天然林化している林内では枯損・倒木は自然の摂理ですが、これだけ多くの人を通る参道や園路に覆い被さる樹木の管理は大きな問題であり、今回の見学会の大きな目的でもあった。管理に当たっている田中樹木医も悩まされているとのことですが、この問題は全国の管理者が悩んでいるが絶対的な解決策はなく、日常の巡視点検が重要で、小さなものでも危険なものは取り除くことより（他に方策は）ないと思われる。

これまで神宮には数回行ったが、林内を良く見ることはなかった。畑地から森林へ、100年の森を見ることが出来て大変良かったと思う。

大会の簡素化なども影響しているのか、毎年100名以上の会員が増加しているにもかかわらず、出席者が横ばいか減少傾向にあるのは何を意味するのか将来が心配される。

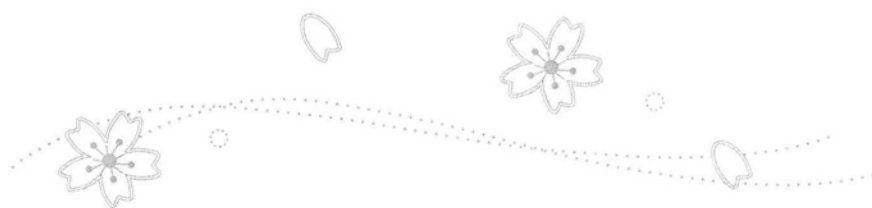
三氏に感謝状贈られる

本会表彰規定に基づき、北海道支部発展に貢献された小田島 悦氏、鈴木順策氏、館 和夫氏の三氏を申請したところ全員承認され、平成27年度定時社員総会（埼玉大会）で表彰されました。今回は本部、地区協議会および支部の役員など会運営に貢献された32名が対象で、21名が出席のもと感謝状と記念品が椎名会長より授与されました。

おめでとうございます。



支部役員を代表して表彰を受ける鈴木順策氏



平成 27 年度「北海道支部技術研修会」報告

豊田 栄 (11 期)

平成 27 年度の樹木医会北海道支部 技術研修会が、9 月 18 日 (金) ~9 月 19 日 (土) の 2 日間にわたって道民の森と石狩市浜益区で行われました。

道民の森での研修会は 4 年前の平成 23 年 (2011) 9 月に続いて 2 回目となります。前回の研修では根系域土壌の過度な踏み固めにより樹勢衰退が懸念される「大ナラの保全策」と植栽密度が高く、病気に侵され衰退しつつある「サクラの森の健全化」が課題として取り上げられ、いろいろな意見が出された結果、改善策として「大ナラへの木道設置」と「サクラの森のササ刈り・病害木の伐採」ということを道民の森管理事務所へ提案しました。

管理事務所では我々の提案を受け入れ、その通り実施しました。

今回の研修目的には、その改善策実施後の状況確認もありました。

【研修 1 日目】 最初は道民の森牧場南地区果樹園での研修です。

14:00 から果樹園で開会式を行い、秋本樹木医、真田支部長を講師に、リンゴ、ナシ、マルメロ、ブドウ、ハスカップ、ブルーベリー他、果樹の主な病害虫とその対策、剪定等について研修しました。

病害の診断研修では、秋本講師から樹木のいろいろな病状について説明を聞き、ルーペを使用しながらハシバミのウドンコ病菌の菌体観察やグミの斑点病、その他さまざまな果樹の病状確認を行いました。真田講師には、ブドウやリンゴの剪定について説明していただき、また池ノ谷樹木医からは、ケムシ類で背中の黄と黒の模様が良く似ているモンシロドクガとリンゴケンモン (背上の毛先がカールしている・縮れている) の見分け方等を教わりました。



病害診断研修

次は神居尻地区にある水源の森に移動して苗木の記念植樹です。

今回植樹する場所は牧野跡地で、敷地全体が緩やかな傾斜になっており、土壌はシルト質土壌ですが、前回は同じ牧野跡地でも地形は平坦で礫混じりシルト質土壌でした。せっかく植栽した苗木ですから順調に育って欲しいと思うのですが、管理事務所の方の話と研修参加者の意見では、この場所は土壌の保水・排水性に難があること、傾斜地のため融雪期に苗木が引っ張られて根が浮いてしまうこと、ネズミ類・ウサギ・エゾシカ等の食害を受けること等の問題があり、順調な活着・生育はなかなか難しいようです。

前回記念植樹をした場所へ行き、その後の生育状況を確認してみましたが、ここは長期の停滞水がなく、また獣害や根の浮き上がりも少ないため苗木は比較的順調に育っていました。

神居尻地区では様々な団体が「水源の森づくり」に参加していますが、その中のある団体の人は、苗木の育成管理のポイント・基本は「切り戻し」と話してくれました。

「雪深い地区なので、植えた苗木が雪に引っ張られて枝抜けあるいは枝幹折れする。でもその折れたところで切り戻しをすると根は生きているので再び成長する」とのことです。

この他生存率の高い樹種や獣害対策等についてもいろいろ話してくれましたが、まずは植栽した苗木を生かし育てていく方法のひとつとして参考にしたいと思います。



苗木の記念植樹

この後 18:00 から貸し切りのコテージで、楽しくにぎやかな懇親会が催され、夜遅くまで大いに盛り上がりました。

(食材をどっさり仕入れ、たくさんの料理作りに奮闘していただいた阿部事務局長、そして一緒に協力していただいた皆さん、ありがとうございました。)

【研修 2 日目】 まずはサクラの森の視察からです。

4 年前には林床を覆っていたササが刈り取られ、また被圧木と病気に侵され衰退の激しかったサクラが伐採処理されたため、とても明るい樹林になり、残されたサクラと林床には十分な光が当たるようになりました。

樹林地の光環境が改善されたことで今後は林床植生も豊かになり、地温の上昇、土壤生物の活性の高まりによる有機物の分解、土壤物理性の改善等、根系の発達にも好影響を及ぼし、サクラの地上部の健全な成長も十分期待できるものと思います。



手入れされて明るくなったサクラの森

ただこれまで過密状態の中で育ってきたために、樹冠競合で樹高の割には全体的に樹冠・枝張がまだ貧弱で、花のつく位置は主に高いところにあるような状況です。もっと低い位置、出来れば手の届くような位置に花が着くようになって欲しいのです。金田樹木医からは、ひとつの案として縮伐という話も出ていました。サクラの健全な生育には維持管理が必須です。今後サクラの森が道民の森の名所となることを期待したいと思います。

次は、道民の森のシンボルツリーで推定樹齢500年とも言われる大ナラの視察です。サクラの森から大ナラへ向かうコースの途中ではいろいろな樹木に出会いましたが、それらの中で特異な樹形のものについてはその場で観察、意見を交わすと共に、樹木の病状に関してもその都度秋本樹木医に説明していただきながら目的の場へと向かいました。

さて大ナラに到着しましたが、樹木の周囲にはロープが張り巡らされ、側には近寄れないようになっていました。これは大ナラの樹冠上部に懸り木があり、危険防止のための措置だそうです。このロープの内側には、4年前の研修で改善策として提案した、踏圧による土壌固結防止用のスノコ状木道が樹の根元周りを覆うように角型に設置されていました。



大ナラ的环境改善状況を確認

吉田講師からは「人と樹のふれあい、特に子供たちが巨樹・古木と触れ合えることの大切さ」

について、また鈴木順作講師からは「樹木診断時の基本と心構え、樹木の保護・保全」についてそれぞれ話していただきました。大ナラは4年前より葉量が増し、また葉色も濃くなっていたことから、樹勢は確実に回復していることが窺えました。

葉色が濃くなったという事は光合成を行うタンパク質が以前よりも多く合成されたという事であり（単純に窒素分の供給があった場合にも同様に葉色は濃くなりますがここでは施肥が行われていません）、これは根からの土壌溶液（土壌水）の吸収が高まったから、すなわち木道設置によって根域のある一定面積における土壌の過度な締め固めが行われなくなり、不良であった土壌の通気・透水性の改善向上で、細根からの養水分吸収が積極的に行われるようになった結果と推測されます。木道設置の効果が出ているものと思います。こうした状況が今後も見られるなら、道民の森のシンボルツリーである大ナラはまだまだ大丈夫と思われれます。

次に道民の森で2番目に大きい大ナラを視察しましたが樹冠上部の方で大きく幹折れしていました。ひどい折れ方です。鈴木順作樹木医が診断した通り、原因はクロサルノコシカケによる褐色腐朽です。堀大才氏の著書には、「腐朽の型として針葉樹には褐色腐朽が多く、広葉樹には白色腐朽が多いが、広葉樹でも大径木になると褐色腐朽被害が多く発生する傾向がある」と書かれています。



腐朽により幹折れしたNo.2の大ナラ

樹木の腐朽病害は大きく幹枝腐朽と根株腐朽に分けられますが、クロサルノコシカケは幹の心材腐朽でミズナラの生立木を腐朽します。幹折れや根返り倒伏に要注意です。

ここで道民の森の研修を終え、次は石狩市浜益区の黄金山にあるイチイを目指しました。

最も新しい巨樹・巨木林調査（平成12年）によると、幹周5.4m、樹高18m、推定樹齢1500年でイチイの部では全国第18位、道内第5位ということのようで、どっしりとした容姿はまさに北海道の厳しい風雪に耐え、生き抜いてきたことを実感させます。ごつごつとコブのある太い幹には大きく縦割れが生じ、かなり大きな空洞が出来ていますが「わしはまだまだ大丈夫じゃ」と言っているような力強さがあります。（表紙写真）

研修の最後は、石狩市浜益区の送毛山道にある千本ナラの視察です。国道231号線から山道に入り、蛇行する道路を車でかなり上ったところに目指す3本の千本ナラがありました。

道路から眼下に見える千本ナラまではやや急な傾斜地ですが階段で下ることができます。階段から先には3本の並列した千本ナラに沿って木道が設置されています。推定樹齢は約800年、樹高18mと言われており、3本の古木にはそれぞれ太いしめ縄が巻かれ、願い事が書かれたたくさんの杓文字が差し込まれています。3本のうちの真ん中は両端のものよりやや小ぶりであり、また傾斜地の上の道路から見て右端の千本ナラの太い幹にはマスタケもしくはアイカワタケが固まって着いていました。腐朽は相当進んでいていつ倒れてもおかしくない状況にありました。

アイカワタケはマスタケの近縁種で、私には両者の判別がなかなか難しく、現場で同定することは出来ませんでした。ただミズナラに着くキノコとしての紹介が多いのはマスタケの方です。（両方のキノコは針葉樹、広葉樹どちらにも発生します）

腐朽が進んだ右端の千本ナラの樹幹は、支柱でがっちり固定されており、何とか倒れずに生きていて欲しいという管理者の強い気持ちが感じられました。



幹の腐朽が進んでいる千本ナラ

今回は、前回の研修課題についてその改善策が講じられた処の状況確認が出来たこと、また道央圏の比較的身近なところに在る巨樹・古木を見ることが出来たこと、そして現場や懇親会で会員同士の意見交換・情報交換が行われたことなど有意義な研修会でした。

講師を勤めて頂いた皆さまにお礼を申し上げます。ありがとうございました。

平成27年度 日本樹木医会北海道支部の活動報告

事務局

日本樹木医会北海道支部は北海道に在住する樹木医である正会員（一般社団法人日本樹木医会の会員）と賛助会員（緑化・造園関係者）によって構成されており、平成27年度現在の会員数は、正会員が54名、賛助会員が5名である。平成27年度における支部の主な活動状況は、次のとおりである。

1 日本樹木医会の行事に関わること

(1) 平成27年度一般社団法人日本樹木医会理事会

平成27年6月5日（金）総会に先立ち、埼玉県大宮市「大宮ソニックシティ」で開催され、審議事項は通常総会における提出議案の内容の検討と確認であった。

(2) 平成27年度一般社団法人日本樹木医会定時社員総会

平成27年6月5日（金）理事会に引続き総会に真田支部長ほか鈴木順策顧問、明島直之会員が出席した。全国から正会員2,119名中359名が出席、委任状962名で規定数を満たし総会成立。会長の挨拶のあと、本会の運営に功労のあった方々に感謝状と記念品の贈呈があり、北海道支部から小田島悦、館和夫、鈴木順策の三氏が受賞された。議事に入り平成26年度の事業・決算報告、平成27年度の事業計画・予算（案）等を審議し原案通り可決された。（ニュース104号参照）

(3) 平成27年度 一般社団法人日本樹木医会 第2回理事会・第1回業務執行理事会合同会議

平成27年8月8日（土）東京都北区王子「北とぴあ」で開催され、真田支部長が出席した。審議された主な議案は、人事に関する事項、理事会の運営について、各部会活動について（事業実施計画 業務執行状況等）、各理事から出された要望や意見についての質疑応答があった。平成28年度兵庫大会と29年度大会開催予定地群馬県について等であった。（ニュース105号参照）

(4) 平成27年度 一般社団法人日本樹木医会 第3回理事会

平成28年3月26日（土）東京都北区王子「北とぴあ」で開催され、真田支部長が出席した。主な審議事項は、28年度暫定予算、平成28年度定時社員総会（兵庫）の議案等であった。

(5) 倫理審査委員会委員

平成27年11月倫理審査委員会が開かれ、委員の橋場一行氏が出席した。

2 北海道支部の総会・役員会

(1) 総会

平成27年度北海道支部の通常総会は平成27年4月10日（金）14:00~15:30、KKRホテル札幌（2Fはまなす：札幌市中央区）で、会員37名（正会員37名、賛助会員0名）が出席して

開催された。

真田支部長の挨拶に続き、来賓として出席された北海道水産林務部森林環境局森林活用課・主幹 工藤森生氏、主査 宇田川智義氏から挨拶と樹木医に関わる北海道の行政施策についてご説明をいただいた。その後、議長に鮫島宗俊氏（16期）を選出し、議案審議が行われ、平成26年度の活動報告と決算報告、平成27年度活動計画と収支予算（案）が原案どおり承認された。さらに、「技術研修会」の開催地、「樹守」No.24の発行、グリーンコーディネーター（10名）の推薦等について討議され承認された。

（2）役員会

第1回理事会が平成27年12月21日（月）札幌市（北海道林業会館3F会議室）において開催され、理事7名、監事2名が出席し、平成28年度通常総会の開催予定、講演会の講師、「技術研修会」の内容、「樹守」25号の発行予定、平成28年度の支部活動計画、役員改選等について、検討を行った。

3 講演会・研修会

（1）講演会

講演会は、平成27年4月10日（金）15:45~17:00、KKRホテル札幌（7F北斗）において、鮫島惇一郎氏（元森林総合研究所北海道支所遺伝研究室長、自然環境研究室主宰）により「エンレイソウ探究の旅」と題して講演をいただき、会員37名が受講した。

（2）研修会

平成27年度の「技術研修会」は、会員19名が参加して、平成27年9月18日（金）～19日（土）の両日、当別町の「道民の森」で行われた。

- ①牧場南地区の果樹園では講師の道総研林業試験場緑化樹センター長 清水樹木医、同元保護部長 秋本樹木医、支部長の真田樹木医を中心にリンゴ、ナシ、マルメロ、クリ、ブドウのほかハスカップ、ブルーベリーなどの小果樹を対象に剪定方法や管理、病害、虫害対策などについて検討した。
- ②神居尻地区では一般市民による「水源の森」づくりエリアで記念植樹しながら、多雪地帯における森づくりについて、管理担当者から説明を聞くとともに講師の雪印種苗顧問の豊田樹木医を中心に植栽方法や管理について意見交換・検討した。雨も降りだし寒くなってきたため宿舎へ移動した。
- ③翌日は神居尻地区のサクラ植栽地の管理について、金田、秋本樹木医を講師に前回の研修で指摘した間伐、下草刈（約1.8mのクマイザサ密生）実行後の現況と今後の対策などについて検討した。
- ④道民の森のシンボル樹木となっている推定樹齢500年の「大ナラ」、根元の大きな空洞、四方に伸びる太い枝（一部すでに折損）など、今後の管理方法などについて鈴木順策、吉田憲一樹木医を講師に検討した。また、付近の倒れたばかりの大きなシナノキの腐朽実態などを検証した。

⑤巨樹の視察

道民の森から浜益に移動し、国有林内の巨樹「黄金山のイチイ」と送毛山道の「千本ナラ」を視察。イチイの標識にはイチイの部全国18位、道内5位、幹回り5.4m、樹高18m、推定樹齢1500年。「太古の森の守主」と記されていた。「千本ナラ」は3株あり、いずれもどれが主幹なのかわからない程多数の枝が伸び、大きな樹冠をつくっている。その樹冠の下、巨樹の神々しさに圧倒されながら昼食をとり解散とした。

(3)行事・活動に関すること

- ① 北海道支部会報「樹守」No. 24 (2015. 3. 31発刊) を発行し、会員 (正会員・賛助会員) に配布するとともに、日本樹木医会や交流のある各都府県支部、関係機関、関係者等に配布した。
- ② 平成27年度「みどりの環境改善活動支援事業」(北海道水産林務部) のグリーンコーディネーターについて、会員の中から10名の推薦を行った。(2015. 4. 15)
- ③ 日本樹木医会の会誌「TREE DOCTOR Vol. 22」特集カエデ類を、賛助会員5法人に配布した。(2015. 7. 31)
- ④ 札幌市天神山公園で花見会をかねて、満開のサクラや花木を見回り、病虫害を探し原因や対応策などの意見交換を行った。参加者は12名 (2015. 5. 3)
- ⑤ 森林総合研究所北海道支所の一般公開で「緑の相談コーナー」の相談員の要請を受け、樹木医6名が参加し、5件の相談に対応した。今年は公開内容が大きく変わったことと相談場所もかわり、天候も寒く来場者が少なかった。(2015. 5. 16)
- ⑥ オホーツクみどりネットワーク「樹木医と歩く知床悠久の森」に会員4名ほか1名が参加し、一般市民参加者とともに鈴木順策樹木医の解説のもと知床の森を堪能した。知床峠、知床五湖(熊対策の高架木道を湖まで歩く)、岩尾別温泉(ホテル地の涯)・羅臼岳登山口などを回り、帰りに廃校になった峰浜小のハルニレの巨木や緋牛内のカシワの巨木を案内していただき大きな収穫であった。(2015. 8. 29~30)
- ⑦ 「道民森づくりネットワークの集い2015」が、今年は江別市北海道開拓の村で開催され、北海道支部として、「樹木医相談コーナー」を開設した。交通の便も悪く、来場者がきわめて少なく6名で対応したが相談は3件のみであった。(2015. 10. 18)
- ⑧ シンポジウム「みんなで考える恵庭の緑」が恵庭市民会館で開かれ、女性だけのパネラーで樹木部門として後藤暁子樹木医がパネラーを務められ、会員6名が参加し聴講した。(2015. 11. 25)
- ⑨ 試験研究機関や関係団体などが開催する発表会やシンポジウムなどへの参加を呼びかけた。

1. 編集の目的

近年、貴重な樹木の樹勢回復と永く保存するため、樹木医の役割と活動は重要になっている。これに携わる樹木医相互の技術や情報の交換と、これらを事業としている人達との技術、情報の交換を行うことを目的に、定期的に情報誌を発行する。

2. 執筆者

一般社団法人日本樹木医会北海道支部の正会員、賛助会員、その他の関係者。

3. 発行回数

おおむね年1回とする。

4. 規格・体裁

表紙・裏表紙はカラー、本文は原則として白黒一色刷り、A4版とし、50ページ前後で適宜調整する。

5. 原稿の書き方

①原稿は原則として電子版とする。

原稿はA4版規格、体裁で編集するので、ワード原稿でメール添付またはCDなどで提出する。

②原稿の文字と規格

原稿の文字は常用漢字を用い、現代仮名づかいとする。

題字と執筆者のフォントはMSゴシック、本文はMS明朝を原則とする。

特別な字体を希望する場合は、画像として貼り付ける。

文字の大きさのポイント数は、題字は16pt、本文は10ptを原則とする。

③字数と行数およびページ数

1ページの字数はおおむね一行40字、38～40行とし、題名はセンターに、執筆者名は次行の右端に揃える。

図表、イラスト、写真などを入れる場合は、ゴシック体(8pt)でキャプションをつける。

上下、左右1cm程度の余白を作る。

1課題4ページ以内を原則とし、最大でも6ページ以内とする。ページ番号は付けない。

④1文字あける場合

句読点、括弧、ハイフン、文の書き出し、改行のときは1文字あける。

⑤用語、数字の使い方

学名や学術用語などは各学会の例によることとし、動植物や菌類の名称、外国の地名、氏名などはカタカナ、病名はひらがなを用いる。数字はアラビア数字を用い、学名は斜体文字とする。

⑥数値の単位

数値などの単位はC・G・S単位とする。(例 長さcm、重さg、広さm²、ha、時間S)

⑦本文を見やすくするため、大、中、小見出しを用い、見出しはMSゴシック体。

6. 原稿は編集者に電子版で送付する。随時受け付けし、毎年2月末日締切(厳守)とする。

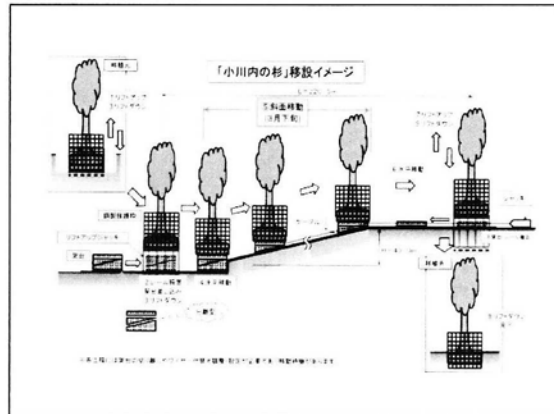
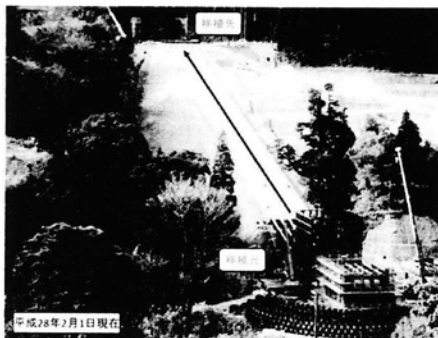
《編集後記》

今年度も会員の皆様から内容の濃い力作ぞろいの原稿をいただき、おかげさまで無事第 25 号が発行できました。年度の節目にも当たるこの忙しい時期に執筆頂き有難うございます。

平成 27 年度は北海道から 4 人も樹木医合格者が出て大変喜ばしい年でした。これからは実地経験も積み重ねて声なき樹木の保護・治療等に活躍されるよう期待しています。

昨年から気になっていること、それは九州・福岡県のダム建設に伴う大規模な移植工事です。移植するのは山祇神社の「小川内の杉」。概要は樹木医のMLやインターネット等でご存知の方もいらっしゃるかと思います。根元が一つにつながっている三本の杉。樹高 39m、根回り 13.4m、樹齢は 700～800 年で佐賀県指定天然記念物です。

「小川内の杉」移植 作業状況



重さ 500 t を超える巨木を鉄棒で囲い、斜面にレールを敷いて 220m離れた現地より 43m高い場所へ移す。移植工事金額は前代未聞の 7 億 8600 万円、全額福岡県（民）が負担するそうです。

事の発端は佐賀と福岡の県境を流れる那珂川に福岡県が五ヶ山ダムを建設することになり、流域にあった佐賀県の天然記念物の杉は水没することになりました。このため地域住民から保存を求める声が上がリ、福岡県はその可否について 02 年に調査し、いったんは「移植困難」との結論を出したがさらなる強い要望を受けたため、11 年に専門家による検討会議を発足させ再検討した結果、（その間の技術の進歩等もあり）13 年に一転して「移植は可能」と判断した（文化財の保護という観点も踏まえての判断とは思いますが…）。この検討には福岡県樹木医会の森氏をはじめとする樹木医も参加しているようで、判断の一端を担う責任の重大さを考えるとかなりの重圧であったことと推察します。

佐賀県指定天然記念物（木）の移植費用を福岡県（民）が負担することについて福岡県民はどう感じているのでしょうか、賛否両論があったことと思います。また大杉の移植は事例も少なく、特に今回は生態も特殊でさらに困難が予想され、枯れた場合の対応も厳しいものになりそうです。

さてあなたはこの移植工事をどう考えますか。

グーグルで見るとすでに運搬路は出来ており、予定では 4 月中旬に移植先に着地させるようです。ダム水没から樹木を救う話は御母衣ダムの「莊川サクラ」が有名ですがこの「小川内の杉」も後世に語り継がれることでしょう。うまく活着して生き続けることを祈るばかりです。

樹守 (KIMORI)

平成 28 年 3 月 31 日発行 通巻 25 号
発行 一般社団法人 日本樹木医会 北海道支部
住所 〒060-0004 札幌市中央区北 4 条西 5 丁目 (一財) 北海道森林整備公社内
電話 011-281-4241
発行人 真田 勝
編集人 熊谷 恒希
印刷製本 榊山岸コピーセンター



(浜益の千本ナラ)